

# 東方電腦携帯獣

ノウレッジ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは新しい弾幕のカンフル剤になればと、八雲紫が導入したポケットモンスターのお話。

極めて平和に終わるハズのポケットゲームの一大流行に、何やら怪しい影が1つ……。

こちらpixiv及び私のブログにもマルチ掲載されております。

目次

その  
4

|

48

その  
3

|

34

その  
2

|

15

その  
1

|

1

その1

「ッれいとうビームッ！」

「掻い潜ってックロスポイズンッ！」

『ガメエツ！』

『クウ、ロアツ!!』

一閃。

猛毒の十文字切りがその甲羅に覆われた胴体に炸裂し、残った体力を削り取った。

「……カメックス、戦闘不能！ クロバットの勝ち！」

『決まったあ！ クロバットがこれで2連勝だ！ これでにとり選手の残るポケモンは1体のみ、後がありません！』

「戻って、カメたろー」

ポケモン大会・紅魔カップ決勝戦。自らも選手として参戦したレミアは先に出したヌケニンをとりの一番手ルンパツパの「やどりぎのたね」で失うも、クロバットの速攻で素早く撃破。続くカメックスも難無く倒し、完全に形勢を逆転させていた。

「やー、流石は吸血鬼の女ボス、強いねー」

「アンタこそ。まさか私のヌケニンの「ヌーズベルト」が一瞬で沈むなんて予想してなかったわ」

ちなみにレミアが今繰り出しているクロバットのニックネームNは「くーりっしゅ」。ネーミングセンスは相変わらず壊滅的であった。

「で、どうするのかしら？ ドン臭いポケモンじゃくーりっしゅには勝てないわよ？」

「そうだねえ……。ここはやっぱ、お気に入りで行くっしょ！」

決勝戦、3 vs 3のポケモンバトルもいよいよ大詰め。まだ1匹を隠し持っているレミアに対し、背水の陣と化したにとりを取り出したのは――

「ゴラたろー、GO！ GO！ GO！」

『アバアアアア！』

青いボディに黒い鎧のような甲羅を持つ亀型のポケモン、アバゴ

ラだ。

「へえ、またそんな鈍そうなヤツを出すワケ？　くーりっしゆの速さがまだ分らないみたいね」

「まさか。遅いなら、速くすれば良いだけさー！　ゴラたろー、〃からをやぶる〃！」

にとりが指示した技は自分の防御ステータスを削って、攻撃ステータスとスピードを上昇させる、いわゆる攻撃一本槍にするものだ。中途半端な防御は無駄と知り、倒される前に2体抜きを狙う作戦だろう。

ただしそれは、相手の攻撃によって倒されやすくなるという危険も孕んでいる。後が無いにとりにとっては覚悟を示すものでもある。

「アンタの雨パ（〃あまごい〃）を利用する戦術を取るパーティーは見事よ。だから……ここで沈みなさい、忌々しい雨と共に！　くーりっしゆ、〃さいみんじゅつ〃！」

「ハッ、冗談！　ここで優勝して、副賞の『紅魔館の野菜セット』を胡瓜マシマシで頼むんだあ！　ゴラたろー、〃アクアジェット〃！」

☆

弾幕ごっこに使うスペルカード、それは美しさを兼ねた自分の鍛え上げた腕の成果でもある。

逃げ道が設定されているのは遊びだから当然だとも、隙間無く何分も弾幕を撒いていたら妖力の差が出て不公平だからとも言われているが、そこはどうでも良い。

問題は、その弾幕の配置や構図、色合いから行動パターンに至るまでの全てを自力で考えるのが基本となる点にある。

無論、他者の手伝いを得たりヒントを貰ったりする事は何の問題も無い。そういうタイプの弾幕があるのは事実であるし、記憶というものが存在する以上、何かしらのインスピレーションを受けるのは当然の事だ。

そう、インスピレーションを受ける。そこが問題になっている。

実は現在、幻想郷では新たなスペルカードが生まれにくくなっていた。

新しいスペカを考案しても、既に誰かが所持しているものと酷似していたり、実用性に欠いていたりしているものばかりなのだ。長く弾幕勝負が流行した弊害と言える。

これにより弾幕ごっこが廃れる事を危惧した妖怪の賢者・八雲紫は打開策を練り、そしてこう提言した。

「常に弾幕勝負の事を考えているから新しい案が浮かばないのです」と。

紫は幻想郷各地に特別な仮想世界のバトルフィールドを展開できるシステムを配置し、同時にポケットゲームの『ポケットモンスター』シリーズを住人達に貸与してそれを連動。ゲームの基本であるターン制のバトルでは無く、リアルタイムで指示を出す事でポケモンが動き・躲し・泣き・笑い・飛び・そして戦う。そんな不思議な娯楽を提供したのであった。

これが幻想郷に大ヒット。

「作戦通り行くわよエアームド、ステルスロック！」

「だったらこっちも最初から突っ走るぞ！ ブーバーン、かえんほうしゃッ！」

山では盗撮に関して文と妹紅が熱いバトルを繰り広げ。

「ヤンマくん、エアスラッシュッ！」

「また怯ませる気か！ バツフロン、アフロブレイク！」

寺子屋の授業としてリグルが慧音から指導を受け。

「メガネ、ドラゴンクロー！ 真のゴーグルは貴方よ！」

「何の当てつけだい……。ティヤール、まもる！」

華扇が面会場所に選んだ香霖堂では暇潰しとしてバトルが店主と行われ。

「モグワイン、トドメのドリルライナー」だあ！」

「受けて立つわ！ ミミロップ、きあいだま」で迎え撃って！」

勇儀の暇潰しとして他人との関わり合いをあまり好まない鈴仙すら嬉々としてやっているのだから。



な感想を抱いた。

話を聞いてみた所、どうも野良試合を仕掛けて遊んでいたところ、いきなり襲撃されて強制操作された後に一番強いポケモンを奪われたという。

そしてその犯人というのが……。

「何、霊夢と魔理沙が!？」

「うん……」

「あらあら、本当なの？」

「ぐすつ、他に紅い巫女と黒い魔法使いはいませんし……」

紫はこれを危惧していたという。

どうしても入手しにくいアイテムやポケモン、一方を手に入れば他方が困難なケース、所持するソフトによる出にくさ出やすさ等々。そういった問題を解決するのが交換なのだが、当然それを悪用する事も容易い。

「うう、折角3Vコマタナの色違いをメイドさんから貰ったのに……」

「私はダゲキの5V……」

「それだけじゃないよ、キーストーン持ちのヤミラミもだよ……」

「こっちはメガシンカで活躍してくれてたギャラドス……」

3Vだのキーストーンが分からなければ、兎に角取り分け強い個体だと思えば良い。

紅魔館へ遊びに行った帰り道、咲夜の色違い青いのキリキザンと美鈴のダゲキを相手に1時間に及ぶ大激闘を繰り広げ、見事勝利したという。

その記念にお互いポケモンを交換し、これから育てる新しい仲間ワクワクしながらスキップしていたところだった。何者かが物陰から襲撃されてゲーム機を略奪、子供でも労せずには捕まえられるポケモンと強制的に交換させられたという。

「しくしく……」

「2人が、ねえ……」

俄かには信じがたかった。確かに2人とも傍若無人だったり常に我を通すような性格だったりするが、そんな強盗のような真似をする



とは考えにくい。これでも10年来の付き合いなのだ、そのくらい分かる。

「紫、どう思う?」

「うーん……、被害者がいますしねえ……」

カランコロソツ!

「すみません、ここですかポケモンの相談所って!」

「魔女と吸血鬼にポケモン盗られましたー!」

2人を慰めつつ紫と共に首を傾げていた所、再び来客が。今度は売り出し中の九十九姉妹だ。

「ごめんください、窓口ってここかしら? ウチのこいしが……あら?」

「霖ちゃん霖ちゃん、大変だよ! 天狗が2人来てポケモン奪っていったんだよ!」

「霖之助! お前、朱鷺子にどんな教育をしているんだ! 背後から襲うなど強盗じゃないか!」

「朱鷺子く、出来心だったんだよねく? 今ならもこたん怒らないから、素直に出ておいでく?」

「霖之助さん、ちよつとこころちゃんの教育方針で話が」

「私は失望したよ、こころを預けられると本気で信じていたのに裏切られたのだから!」

「りいさんのすけえく? ちよつと顔貸しなさいな? 私がDSだって事、もう1度教えてあげるから?」

「酷いよ霖之助さん、私の大切に育ててたメガヤンマをバルビートと替えて、NNが『ごきぶり』だなんて……」

「紫様、大変です! 幻想郷各地で強盗が! ちえええええええええええん!」

「わぷつ! わ、私は大丈夫ですから! ちよつとてーちゃんにニャオニクスを……」

「プリズムリバーを代表して参りました。事件を訴えるのってここで

合ってます?。」

「同じく、白狼天狗を代表して参りました。霖之助さん、あのタヌキに天誅を!」

程無くして更に来店者が多数到来。皆が皆、ポケモンを取られたという。

紫と霖之助は目を見合わせた。

犯人はバラバラではあるが、誰もが突然襲われてゲーム機を奪われ、そのスキに強いポケモンを交換させられている。

「うーん、想定していたのより大事ねコレは」

「予想していたのかい?」

「取り敢えずは。どうしても強さだけに目が行くヒトはいますから。しかし、もっと個人同士の小規模なものを想定していたのだけれど……」

藍と橙に興奮した群衆の鎮静化を命じつつ、紫は眉を顰める。

嘆かわしい事である。ポケモンの魅力は強さのみならず、育て方を考えたり、どんな技を覚えさせたりするか想像したりと、バトル以外にも溢れているのだ。

襲撃犯が強さのみを求めているのみならず、他人から暴力を以てしてまで奪うという、その精神の醜さに吐き気すら感じる。

「おどおどざあーん! あの紅白と白黒に言っでよお! 私のポケモン返せっでええ!」

「朱鷺子、落ち着け。ちゃんと話を聞いていたか?」

「くすん……私のギャラドス……。コイキングの時から一緒に強くなったのに……」

「おー、よしよし。取り替えそうね、ちゃんと」

「ホラ幽香。おや」の名前とIDが同じなのにニツクネームを変えられない。画面に出ない裏IDが一致しない証拠だよ」

「……分かった、信用するわ。ま、アンタじゃ私をリグルごと昏倒なんて無理だから疑わしくはあったんだけどね」

「え、じゃあ私のドラピオンは……」

「奪った奴が別にいるって事よ。……許せないわ、グラスミキサーか

らギガドレインしてハードプラントのコンボをダイレクトアタックで味わわせてやるんだから」

霖之助の言う裏IDという単語には馴染みの無い人もいるだろう。トーレナーが捕まえたポケモンにはIDによる識別がふられ、これが違うとニックネームを変える事ができない仕様になっているのは一般によく知られている事だ。そして表に見えるIDとは別に裏IDというものがあり、これが色違いなどの出現に関してシステムに影響を及ぼしているのである。

紫はそのシステムを利用し、互いに「おや」の名前が一致する相手にポケモンを譲渡させ、ニックネームを変えさせるよう指示。これが変えられないなら名前とIDの同じ別人である、という事になる事を証明し、犯人と疑われている人々の潔癖を証明した。

「……ちなみに聞くが、紫。IDが一致する確率は？」  
「裏ID以外に表IDにも目に見えないケタがあるの。それまで一致するとすると、正直言って相当なレベルよ。幻想郷の全員に与えて1つダブリが出るかどうかってトコかしら。目に見える5ケタだけでも1／65536になります。」

そしてこの数が全て偶然だとすれば、その分母は天文学的どころじゃない確率になりますわ」

表IDは表記されないものを含めて10ケタ、裏まで含めれば合計で20ケタに及ぶ。偶然の一致は無いに等しい。

つまりそれは、故意にIDを変えなければ幻想郷内では有り得ないという事だ。

誰かが悪意を持ってこの犯行に及んでいる、そうで無ければ説明がつかない。

問題は、犯人が他人に化け、IDを随時変化させられる能力を持っているという点にある。ミスリードをバラ撒かれたこの状況、解決するのは容易では無いだろう。

「くすん、私のギャラクくん……」

だが目の前でめそめそと泣いているところを始め、被害に遭っている少女が多数いる事もまた確かなのだ。森に来られないだけで被害

者がもつという可能性もある。放置は愚策だ。

「……で、どうするんだい、賢者様？」

「あら、霖之助さんはもう対策が分かっていると思うのだけれど」「ふむ？」

「犯人は強いポケモンを、鑑賞するために奪ったのかしら？」

その一言でピンと来た。

強いポケモンを育てるのはバトルで勝つためだ。ならその勝利がもつと大々的で榮譽あるものならば、勝利の陶醉感もより大きなものとなる。

「犯人の目星は？」

「まだついてません。しかし最低限2人組の可能性が高いでしょうね」

「エサは？」

「幻想郷最強の称号を。そうね、それと最上級のレアアイテムを何点か。リアルマネーの賞金も出します」

「タマゴもつけたらどうだろうか」

「妙案ですわ。6V個体の生まれるタマゴを用意しましょう」

「霖之助？ 何を話している？」

グズる朱鷺子をあやしていた慧音が不審に思っただけ聞いてきた。

それに対し、霖之助と紫はにっこりと笑って返す。

「大会を開こうと思って」

☆

夕方になり日が沈むと、香霖堂を兼ねた相談窓口は終業となる。

だが窓口が終わっても内部の営業は終わらない。普通の企業なら書類整備や報告書などを書かねばならないのだが、香霖堂は違う。

「名前は、そうね……『ポケモンバトル・タッグトーナメント幻想郷大会』とか？」

「シンプルかつ字面で全て分かるね、それが良い。今回は凝らずに分

かりやすさを重視しよう」

「全員に監視をつけましょう。IDも接続する以上こつちからはモロバレですわ」

「いや、見るのは予選を突破したチームにしよう。報告された個体値を見れば初心者でも突破できそうだしね」

「あらあら、犯人が予選落ちしたらどうしますの？」

「再犯が発生するだろうね。だがこの一件が周囲に知られている以上、動きにくくなるはずだ」

今、霖之助と紫は大会を開くべくその準備を推し進めている。

犯人が強いポケモンを求めているのなら、その成果を確かめたいはずだ。そしてその強さを誇示したいという欲求は、暴行事件を起こしているのなら高い事は請け合い。優勝者には商品があるというエサがぶら下がっているなら垂涎の的だ。

「優勝者を狙う可能性は？」

「無いからそんな意地悪な質問をするのだろうか？」

「あらあら、うふふ」

「タマゴは交換できないからね」

優勝賞品は6Vという最強の個体が生まれるポケモンのタマゴと、レアアイテムを複数。タマゴは交換に出せないし、アイテムはポケモンに持たせてトレードするしか無いので、奪うとしても1つずつという手間がかかり過ぎる方法しかない。

称号に至っては変身しては得られないし、幻想郷全土に告知を広めれば誰かが化けていてもいずれ誰が偽物かが分かってしまう。幻想郷全土にブームとして広がっている以上、不参加者を割り出すのも容易くなる。

参加者が多くなるので予選は必至。だからこそ記名制度が生きにくるというものだ。

「犯人が裏IDの事を理解していないのは明白。となれば奪うとすれば孵化した後のポケモンだ。だから君は何が生まれるか知らせるつもりは無いんだろう？それが知られたら犯人が大会に出る理由が1つ無くなってしまうから」

「うふふ、ご名答」

カサリ、と霖之助は1枚の紙を取り出す。今日報告に来た全員から聞いた、奪われたポケモンのリストだ。

「色違いのミカルゲ、限定配信のゾロア、ゴースト、カビゴン、ピィ、スターミー、ゼクロム……、いずれも高い個体値や優秀なタマゴ技を覚えている。使うなら絶好のチャンスか」

「使えば自分が犯人だと明言するようなものですけど、そこまで頭が回るかしらね」

「どうかな、何せ知識や手段から見えるのは中途半端な頭脳だ。黒幕が別にいるかも知れない」

「まったく……楽しく遊んで欲しいものですわ」

「確かに」

その後もトントン拍子で話が進み、あつと言う間に要綱がまとまった。

予選にかける日にちや大会のステージ、配るチラシなどなど。殆どが紫におんぶに抱っこなのが歯痒いが、ただの半妖に出来る事では無いので仕方ないだろう。

「こんな所かしら」

企画書を纏めてホチキスで留める紫。かなり分厚くなったが、彼女曰く「外界の物に比べればまだ薄い方」らしい。

疲労で凝った肩を軽く揉み解す賢者に、霖之助は兼ねてから考えていた事を告げた。

「紫」

「はあい？」

「付き合ってくれ」

「はーい」

……。  
……。  
……。

「えっ!?!?」

唐突な告発が紫を襲った。

何故に? どうして? WHY? そんな空気だったのだろうか?  
共同で作業する内に恋愛感情が芽生えてしまったのだろうか?

いきなりの事態に目を白黒させるスキマ妖怪。

「ありがとう。これで僕もタッグパートナーが出来た、大会に出られる」

「……はあ」

もつとも、そのピンクな空気は数秒で霧散してしまっただが。

つまり『大会に出るから相棒になって欲しい』というだけだったのだ。  
だ。

「霖之助さん、貴方いつか背中から刺されますよ?」

「ん、何故だい? 僕はいつだって誠実に生きてるよ?」

「ギャグで言っていないからタチが悪いですわ……」

返せ、さっきのドキドキを。

「でも霖之助さん、貴方ちゃんと強いんでしょね? こう見えても  
幻想郷の母、弱いパートナーなんてお断りよ?」

「ん、僕の腕を疑っているね? 良いだろう、朱鷺子とここに努力値  
や役割理論を教えたのは僕だという事を教えてあげようじゃないか」

につこり、と笑う紫に対してニヤリ、と笑う霖之助。

そうと決まれば、香霖堂にもセッティングしてある機具を使う  
で。

「使用ポケモンは?」

「大会ルールに慣れるためにも、2対2のダブルバトルで行きましょ  
う。交代は無しの一本勝負」

「良いだろう」

自分のゲーム機と機械をコネクタで接続したら、後は備え付けの  
ゴーグルを装着するだけ。このゴーグルにはウサギの爪に使用した  
のと同じ魔術的GPSが施されているので持ち逃げされない便利な  
一品である。

「じゃ、良いバトルにしましょう?」

「悔いを残さないようにしよう」  
「それじゃあ……クリムゾン、コジヨンド、フライゴン、レイン、お願いします！」  
「エピックトレス、エレキブル、プラテラ、バトルスタンバイ！」  
『コジヨオツ！』『フラアアア！』  
『レキブルウ！』『プウテエエ！』

☆

某所。

そこには奇妙なシルエットを持つ、2つの人影があった。幻想郷は異形の者達の土地ではあるが、その姿は人間のものに近い、もしくは人間と獣の姿を合わせたものが多い。

だがそこにある2つの人影は、そのどちらにも当てはまらなかった。

「……ねえ、これで……勝てるよね」

「勝てるに決まってるじゃん。この大会で名を挙げて、幻想郷最強の称号を得るんだ！」

「うん……」

片や意気消沈。

片や燎原の火。

テンシヨンの差に気が付いたのか、一方が他方に対して訝しげな視線を向ける。

「……怖気付いた？」

「ううん、違う。ただ……これで良いのかなーって」

「なーにを今更」

テンシヨンの高い影が嘆息する。

「勝って友達作るんだろ！ 強い奴には人が集まる！ 月でも地上でも地獄でもそれは変わらないんだから、しゃんとしろ！」

「……うん」

尻を叩いても効果無しと悟ったのか、再び溜息を吐いて片方の人影はその場を去った。



残されたもう片方の影は、ゲーム画面を眺めながら呟く。

「確かに強い、強いよ……。でも……。間違ってるよこんなパーティ……」

その時、月光が少女の姿を照らし出した。

赤と青の触手がそれぞれ3本ずつ背中に生えているが、しかしそれはよく見れば翼だと分かっただろう。

髪の毛と同じ黒のピツチリしたワンピース、赤い三叉の槍。

「マミゾウ、聖……。ぐめん……」

封獣ぬえの呟きが、夜風に溶けて消えた。

つづく

## その2

「サイビール、よく頑張ったな。ありがとう」

「あっちゃー、相撃ちかぁ。お疲れ様、ぎんじよう」

わあああああああ！という大歓声を背負って2人の鬼、伊吹萃香と星熊勇儀のバトルが幕を下ろす。それぞれ繰り出したのはドサイドンとアイアント。超重量級同士の激突に加え、幾度と無く繰り返された幻想郷に馴染みの無い金属音や岩石の破碎音。最後は一撃必殺の“つのドリル”と“ハサミギロチン”が互いにヒットし合い、ドロという結果で幕引きとなったのであった。

『皆様、如何でしたでしょうか。これが次世代のポケモンバトルです！ 幻想郷各地に設置してある装置を用いて行われるこのバーチャルリアリティーとソリッドヴィジョンを用いたゲームは期間限定！皆様、どしどしご利用下さい!!』

司会の席で九尾の狐・八雲藍がマイクを掴みながらアナウンスする。激しいバトルに魅せられたのか、彼女達の声や仕草にも熱が入っていた。

そんな主の、完璧には至らないからこそ愛らしく尊敬できる点を、審判のコーナーボックスから妖猫の橙が微笑ましく見上げていたのであった。

幻想郷全土を巻き込んだ大規模大会、ここに前座のエキシビジョンマッチが終了。

本格的な戦いの火蓋が、いよいよ切って落とされる。

☆

「始まったわね」

「ああ」

選手の控室で、神妙な顔をして画面を見入る紫と霖之助。

一週間前、突如として香霖堂へ押し寄せて来た幻想郷の少女達。彼女らは皆、奇襲の末にポケモンを奪われたという。

奪われたポケモンは皆、強い個体。ならばその力を発揮できる舞台を整えれば、犯人は自ずと現れる。そう考えた2人は選手として自らが開いた大会に潜り込み、事態の解決を図る事にしたのだ。

「私達の戦いは一番最後。今の内に他の選手達の情報を整理しましよ  
う」

「ああ。作戦会議だ」

各地で予選大会を開き、代表を16チーム集めて行われるトーナメント。2人は無所属が集まる予選を勝ち抜き、見事勝利したのだ。

ちなみにあちこちから紫と組む事についてクレームが出たが、霖之助の「窓口業務の一環だ。文句があるならこの業務を代わってくれ。相方は紫だが」という言葉で全員沈黙してしまった。なお、最後の一言で紫は人知れず涙を流したという。

(紫、犯人の目星は?)

(微妙な所ね。変身の能力者はいないし……。別の角度から計算中よ)

ヒソヒソと小声で相談する2人。

予め「作戦会議」という単語を出しておいたので、小声での会話も不自然では無い。

(珍しいな、君が即答できないなんて)

(あら、私は別に万能でも全知全能でも無いんですよ?)

(紫が万能じゃなきゃ僕は何だ、無能か。それとも無能か)

(不能じゃないクセに、僻んで卑下しないの。それともお説教が好み?)

紫自身、自分の限界はよく知っている。おおよその目星はあっても確証が無い。無いなら伝えては無用な混乱を招く。ならば今はまだ推理タイムだ。

そう結論を脳内で下した賢者は、画面に表示されている16チーム32名の内の2人を睨む。

恐らく、彼女達が……。

☆

選手入場用の通路を進むごとに、耳に届く歓声が少しずつ大きくなっていく。

数ある予選の中の1つの代表として、などという高尚な決意は持ち合わせていない。ただ自分達を真似して悪事を働いた輩を締め上げるだけである。

「霊夢、顔怖いぞ」

「魔理沙こそ、無表情はやめなさい」

ジャリツ、と靴底で砂を擦り、バトルフィールド一步手前で立ち止まる。

この大会のどこかに、自分や他の何某か、更には兄貴分に変装してポケモンの強奪という蛮行に及んだ奴らがいる。それがこの上無く許せない。

「許せないわ。博麗神社と博麗の巫女の名声を地に落とすような事をしてくれちゃって」

「元からゼロだろ。それより霧雨魔法店の看板に泥を塗った方が問題だ」

「アンタの方こそ泥まみれでしょうに。でもまあ、それより……」

「ああ。そんな事よりも、だ」

「霖之助さんに疑われた」

「香霖に勝ってって言われた」

——魔理沙、霊夢、僕は君達がやったとは思えない

——だがしかし、朱鷺子とところが嘘を吐いているとも思えないんだ

——もし君達が犯人なら、僕は全力で君らを弁護するし擁護もする——  
——違うなら……

——勝て。僕らか君らがぶつかるであろう、真犯人に

「負けるワケにはいかない!!」

地に落ちたものだと思う。ただ1人の男から、一番長い付き合いの

男から疑われるとは。

普段の行いは見逃してくれているのだと、改めて思い知った。怒られるよりも、悲しまれるよりも、失望されるよりも、見放されるよりも。

疑われたという事実が胸に一番突き刺さったのだ。

『それでは、選手入場です！』

だから、勝つ。自分達をもう1度信じてくれた彼のためにも。

『幻想郷最強をかけたAブロック第一試合、赤コーナーより入場するのは博麗神社予選を通過した博麗霊夢選手と霧雨魔理沙選手！』

「魔理沙、作戦通り行くわよ」

「霊夢こそ、ミスるんじゃないぞ」

『そして青コーナーより入場するのは魔法の森予選を勝ち抜いた朱鷺子選手と秦こころ選手だあー！』

「行くよ、こころ姉」

「頑張ろう、朱鷺子」

互いの瞳に移るのは、強い決意。

彼の信頼を再び勝ち取るためにも、まずは目の前の娘コンビを倒す！

「幻想郷の時代は——」

「妹萌えだぜ！」

「何ってんのよ！」

「娘萌えには勝てない！」

バイザーを取り付け、大会中貸与される腕のホルダーに収納されているゲーム機をコネクタに繋ぐ。

接続にエラーが出なければ、準備完了だ。

『それでは改めて説明しましょう！ この大会のルールを！』

ルールは簡単。トーナメント第1試合は2vs2のタッグバトル。第1回戦に限り交代とメガシンカは禁止、及び伝説級などの一部ポケモンは使用不可能。

どちらかのポケモンを両方戦闘不能にすればバトル終了。勝利となる。

バイザーと、そこから延びるマイクでリアルタイムに電腦世界を生きたるポケモンに支持を出すこの戦い。単なる戦術論以上のものが要求されるのだから侮れない。

『それでは両者、ポケモンを出して下さい！』

まるで脳内にもう1人自分がいるかのような錯覚。その自分が腰につけているボールに手を伸ばすように、リアルの自分もまた腰についていないボールを掴む。本当に手の中にボールがあるような感覚があるから不思議だ。手中にあるのはただのホログラフ、幻影なのに。それが堪らなく臨場感と興奮を引き出す。

「頼むわよ、マフオクシー！」

「勝って来い、ケロケロ！」

『フオアアアアア！』

『コウガアツ！』

「ヤコくん、メイク・アソルティ！」

「カボちゃん、ステージ・オン！」

『アアアアアアツ！』

『プジンツ！』

ボールを放り投げれば飛び出してくる異形の、しかし可愛らしい生命体。

霊夢はキツネ型のマフオクシー、魔理沙はカエル型のゲッコウガ、朱鷺子はハヤブサ型のファイアロー、こころはジャック・オ・ランタン型のパンプジンをそれぞれ繰り出した。

さあ、早く始めようと言わんばかりに4人の視線が審判に集まる。それを受けて、しかし冷静に橙は大きく息を吸う。

「試合……」

さあ、始めようか。

「開始ッ!!」

ポケモンバトルを！

☆

「ヤコくん、マフオクシーに『ブレイブバード』！」  
『フアアアアアアアアアツ！』

先手必勝、赤い隼が青白く燃える炎に包まれマフオクシーに突撃する。

朱鷺子のファイアローの特性は「はやてのつばさ」、ファイアローを猛者足らしめる強力な特性であり、飛行タイプの技全てに先制攻撃の追加効果を与える。

攻撃技は勿論、回復などの補助技もこの効果が適用されるため、非常にスピーディに動けるのだ。

『ファイアロー、先制パンチを狙って突撃イ！ 果たして一撃必殺なるか！』

ただし。

「ケロケロ、『みずしゆりけん』で撃退しろ！」

『コオオガアツ！』

『ファイイイイツ!!?』

「ヤコくん!!」

『ああつと、失敗！ 効果は抜群、逆に大ダメージッ！』

同じ先制技同士なら純粹に素早さ勝負になる。そしてゲッコウガは通称「御三家」シリーズの中では最速をマークする程に速いため、速度で上回るのは困難を極めるのだ。

今も『ブレイブバード』で呐喊してきたファイアローを粘液で出来た手裏剣を無数に当てて撃ち落とした。飛行タイプのファイアローを上回る速度を出す、それがゲッコウガである。

「援護する。カボちゃん、『エナジーボール』！」

「『かえんほうしゃ』でブチ抜きなさい！」

『プジジジジイ〜ン！』

『マ、フオオツ！』

そしてファイアローの動きが止まれば、残る2体の相性は炎・エスパーと草・ゴーストで一見互角。しかしファイアローのフオローに回った事でくさタイプの技を出してしまい、それを掻き消される形でパンプジンが撃ち負けた。

幸いにも「かえんほうしゃ」は命中しなかったが、次もそうだといい保証は無い。

「ヤコくん、大丈夫?」

『アイツ!』

「カボちゃんは何?」

『パン!』

「このまま行くわよ、マフオクシー」

『シイツ!』

「ケロケロ、次でファイアローを落とすぞ」

『コオガ!』

場の流れを一気に持って行かれた朱鷺子とこころ。打開するため、朱鷺子はここで切り札を使う事にした。

「ここ姉、ちよつと早いけどアレを使う。マフオクシーをお願い」

「分かった。カボちゃん、「シャドーボール」!」

「ヤコくん、思いつきり飛び上がった!」

『プウ〜ジンツ!』

『アアイツ!』

「避けて!」

「躲せ!」

影の砲弾を放つパンプジンだが、どちらにも当たる事無く土煙を巻き上げるだけに終わる。

だが、それで良い。ファイアローが上空へ飛び立つ時間が稼げるのなら。

「魔理沙、上から来るわよ」

「日光で目晦ましを狙ってやがるな? そうは行かねえ! ケロケ

ロ、ジャンプだ! ファイアローを逃がすな!」

「え、ちよ、魔理沙!」

『コウ、ガツ!!』

『ゲツコウガ跳んだあ! 凄いジャンプ力、空中にいるファイアローの目の前に躍り出ました!』

カエルの跳躍力を活かし、空高く跳び上がるゲツコウガ。飛行タイ



プでも無いのに空中で目の前に現れ、思わずファイアローは面食らつてしまった。

「ッみずしゆりけんッ！」

「避けて！」

『コウガッ！』

『フアアアッ！』

パンツ！と太腿の印から粘液の手裏剣を生み出して飛ばすゲッコウガ。しかしそこは空中、跳べないゲッコウガでは安定性に欠き、上手く当たらない。

「撃って撃って撃ちまくれ！ 数撃ちや当たるぜ！」

「バカ、誘われてんのよ！ マフオクシー、サイコキネシス」でゲッコウガを地上に下して！」

「させない。カボちゃん、ジャドーボール！」

『プジジジイッン！』

『マフオッ！』

地上からのフォローの牽制に成功すれば、朱鷺子の策は完了。

ゲッコウガは飛べない、跳べるだけ。足場の無い空中では恰好の的だ。

「一気に決めるよ、ヤコくん、ソーラービームッ！！」

『フアアア……！』

全身に日光を溜めて砲撃用に充填するファイアロー。本来なら砲撃までに時間がかかるが……。

「大丈夫だ、ケロケロ！ ソーラービーム」は発動に時間が——」

「ッソーラービーム」、発射ア！！」

『フアアアアアアアアアアアッ！！』

『ガアッ！！』

「何イ!？」

朱鷺子がファイアローに持たせていたのは『パワフルハープ』。チャージ用のエネルギーが込められている使い捨てのアイテムだ。

本来吸収すべき日光をそれで補ったファイアローは、金色に輝くビームをゲッコウガに叩き込み、地面へ墜落させた。

『真正面から日光の光線を浴びたゲッコウガ、地面に叩き付けられた！これは戦闘不能か!!?』

高いスピードの代わりに耐久力を持たない以上、これでジ・エンドかと思われた。

『コオ……、コウガッ!』

「そうだ！ 私達はまだ行けるよな！」

「っ！ “きあいのタスキ”……!」

『耐えたあ！ ゲッコウガ耐えましたあ!』

朱鷺子が攻めのアイテムを持たせていたなら、魔理沙が持たせたのは守りのアイテム。『きあいのタスキ』は体力全開から一撃で倒されるのを防いでくれるのである。

「“かえんほうしゃ”アッ!」

『マフオオツ!』

『プウジンツ!』

朱鷺子の作戦が失敗に終わり、流れは変わらず霊夢と魔理沙が握る。マフオクシーとパンプジンの炎技同士の衝突はほぼ互角だが、場の空気は完全に霖之助の妹分2人が有利だった。

「……姉、ごめん……」

「謝ってるヒマあったらゲッコウガを倒して。“きあいのタスキ”って事は次の一発で落ちるから」

「……っ、うん！ ヤコちゃん、次で決めるよ！ 最大パワーで“ブレイブバード”オツ!!」

『アアイイツツ!!』

再び青白い炎に身を包むファイアロー。反動を受けるデメリットも“きあいのタスキ”の『体力を1だけ残す』という性質上、殆ど気にならない。

「迎え撃て！ 最大パワーで“みずしゆりけん”だあ！」

『コウガアツ!!』

そしてそれは魔理沙も理解している。素早さで優る以上、先にファイアローを撃ち落とせばゲッコウガは負けない。残り体力が1であつても0では無いのなら勝ちだ。

液体の手裏剣を放って撃破を狙うゲッコウガ。ただし、みずしゆりけん”は命中する弾数がランダムであり、もし少ない数しか当たらなければ、ファイアローが突破してくる可能性がある。

「行けえ！」

『アアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

「かませえ！」

『ガアアアアアアアアアアアアアアッ！』

青い手裏剣と青い隼が正面からぶつかり合い、爆発。色濃い煙が周囲に広がり、視界を覆った。

『両者激突！ 勝敗や如何に!!』

もうもうと立ち込める黒煙。互いの目の前を遮られ、迂闊に指示の出せない状況。今か今かと煙の晴れる瞬間を待ち、そして……。

『キュアア……』

そこには片膝をつきつつ前を見据えるゲッコウガと、引っ繰り返って目を回しているファイアローの姿があった。

「ああつ、ヤコくん!？」

「ファイアロー、戦闘不能！」

『水タイプと炎タイプの速攻アタッカー同士の対決！ 軍配はゲッコウガに上がった!』

『コガッ!』

まずは一匹、と小さくガッツポーズをするゲッコウガ。それが彼の体力が残り僅かである事を如実に示している。

「良いぞ、ケロケロ！ そのまま、れいとうビ——」

「魔理沙、ゲッコウガを下げて！ パンプジンがない！」

『プププジィ〜ン!』

『ゲッ、コオオオオオオオオオガアッ!』

「なっ!？」

だが次の瞬間、僅かに残っていた土煙に紛れて接近を許したパンプジンからの、”シャドーボール”が炸裂。ゲッコウガもまたファイアローと同じ姿勢で崩れ落ちた。

『コ、ガア……』

「け、ケロケロツ!？」

「バカ、2対2って事を忘れてたでしょ」

「……ゲッコウガ、戦闘不能!」

『しかしその決着の喜びも束の間! ゲッコウガもダウン! 勝負は1対1に持ち込まれました!』

「ありがとう、ヤコくん。お疲れ様でした」

「サンキュー、ゲッコウガ。ゆっくり休んでくれ」

ボールから出る赤い光線によって姿を崩され、ボールに戻るゲッコウガとファイアロー。

残るポケモンは霊夢のマフオクシーと、こころのパンプジン。相性はほぼ互角だ。

「……アンタとの真剣勝負なんて何時以来かしらね」

「随分、久し振り。だから……」

「まあ待ちなさい。アンタの言いたい事は分かるわ。せーので行きましょう」

「ん。せーの……」

「最強の座をかけて私と戦え!!」

「カボちゃん、〃シャドーボール〃!」

「マフオクシー、〃サイコキネシス〃!」

『プツジン!』

『クシィアアツ!』

互いにニヤリと不敵に笑い、ブチかまされる攻撃。影の砲弾と思念の波動は互いにぶつかり合って互角、相殺される。

「〃かえんほうしゃ〃!」

『パアツ!』

『フオオ!』

続いて放たれるは灼熱の炎。こちらも周囲に熱風をまき散らしながら相殺となった。

『技の威力は完全に互角! さあ、次はどうする! 決定打を先に決

めるのはどっちだ!」

「そのパンプジン、やるじゃない。炎タイプに炎技で互角なんて」

「パパがくれたバケツチャを育てた。弱いワケが無い」

「……っ、ムカつくのよね。そうやってパパ、パパって。人の立ち位置ホイホイ奪っていつて……、アンタは嫌いじゃないけど、そういう所はムカついてしょうがないのよ! マフオクシー、めいそう!」

ギリ、と鳴るのは霊夢の歯軋りの音。

そうだ、元々彼のそばにいたのは自分と相棒のハズなのに、今いるのは誰だ。娘を自称する(他称された?)小娘2人だ。年を経て香霖堂に寄り付く事が減ったのは仕方ないとして、信頼や心の中の最も親しい立ち位置すら奪ったのは許せない。

ある意味、霊夢は今回の犯人に感謝していた。その何某共がいたからこそ、自分の立ち位置がすり替えられていた事に気付けたのだから。

「カボちゃん、パワーアップしてくる。かえんほうしゃ」で倒される前に倒すよ」

『プパッ!』

「ッやどりぎのタネ!」

『ププププププッ!』

体力を吸い取るべく、ドレイン効果のある植物の種を吐き出すパンプジン。

これまでは互角の威力だった技も、めいそうで特殊ステータスを強化されてしまえば押し負ける。元々遅いパンプジンを速いファイアローでカバーするのが2人の常套手段だったのだが、それが瓦解した以上、無駄に手をかける必要は無い。

「サイコキネシス」で瓦礫を盾に!」

『フォアッ!』

そしてそれは、霊夢も同じ。まだトーナメントは続く。グダグダしているつもりは毛頭無いのだ。

「そう来るなら、カボちゃん、ッやどりぎのタネ」連打! 撃って撃って撃ちまくって!」



シーの体力をゴツソリ削り取った。

『フオアアアアアツ?!』

「ま、マフオクシー!!」

『キッツイ一撃が炸裂ウー！ これはマフオクシー、ダウンか!!?』

こころの戦術は三段階に分かれる。

最初の「やどりぎのタネ」は単純に体力吸収狙い。当たれば良し、防がれば次へ。

次の「エナジーボール」で作った疑似「ロックブラスト」は防がれる事が前提だった。防がれなければそれはそれでスキになる。

最後の「シャドーボール」こそ本命。フルパワーかつ至近距離で当ててのワンショットキルを狙ったのだ。「サイコキネシス」で瓦礫を防ぐという事は、注意が岩に向くという事。つまり下からの攻撃には無防備になる。

もしあそこでパンプジンに気付いても瓦礫をこちらに落とす前に接近する事は出来た。繋ぎとめた岩の板の陰に既に潜んでいたからだ。岩で無くパンプジンの攻撃を防げば、瓦礫の流星に身を晒す。

「どう? どう? パパのメタグロスと戦ってた時に編み出したの」  
こころにとつてみれば、まさに一撃必殺。これで決まると完全に思っていた。

もし彼女にとつての誤算があるのなら、「めいそう」だろう。

『フオオ……!』

『立ったあー! マフオクシー、何とか立ち上がりましたあー!』

マフオクシーの使った「めいそう」で上昇するのは特殊攻撃力と特殊防御力。「シャドーボール」に対する抵抗も強くなっていたのだ。

そして、体力がギリギリで持ち堪えたという事はつまり、マフオクシーの特性が発動する事も意味する。

特性の名は「もうか」。その効力は「体力が残り少なくなれば、炎タイプの技の威力が上がる」というもの。そこに「めいそう」で得た強化を合わせれば……。

「ブラスト——」





んで勝手にピンチになるのはやめてよね」

「へっへっへ、この魔理沙さんはそんなへましないぜ」

ケラケラと笑う魔理沙に毒気を抜かれたのか、霊夢も溜息を一つ吐いてそれ以上の言及をやめた。

そして2人は視界の端に射命丸文が操る中継カメラを見つけると、勝利の笑みを浮かべてVサインを映してやるのであった。

一方の朱鷺子とこころサイドでは、敗北による悲痛な雰囲気は漂っていた。

偽物だったとは言え自分達からポケモンを奪った犯人に負けた事、父代わりの人から教わった役割分担の戦術を相手も使用した事に対応が遅れた事が心を苛む。

何より朱鷺子は焦りから自身より早い相手にスピード勝負を挑んだ事が、こころは勝ったと思って油断してしまった事が突き刺さっていた。

「……朱鷺子」

「こころ姉……」

「ごめんなさいっ!」

え?と2人ともきよとんとした顔で首を傾げる。

「なにでこころ姉が謝ってるの?」

「朱鷺子こそ」

「……だって、最初に何も考えずに『ブレイブバード』で特攻しちゃったし」

「『やどりぎのタネ』を最初から使っていれば、タスキでゲッコウガは持ち堪えなかった」

「『ソーラービーム』で仕留め損なっただし……」

「作戦が失敗したのは私も同じ」

「あの後、焦らないで上空から『だいもんじ』で爆撃してれば多分2対1で勝ってた」

「そもそもヤコくんは最初から不利だった。私がつとちゃんとフォローするべきだった」

「……………」

「……………」

「ぷっ」

あはははははははは！ と軽快な笑い声が響く。

結局、お互いまだまだ修行不足だったのだ。たられば話に頼るようでは猶更。

次は頑張ろう、お互いにそう誓い合い、朱鷺子とこころは力強く抱き締め合った。

「あーらら、娘さん達、負けてしまわれましたわね」

「娘じゃないってば」

「似たようなものでしょう?」

「……まあ良いや」

第1試合から熱戦を繰り広げた幻想郷大会、2回戦は霧の湖代表の咲夜・美鈴ペアと太陽の畑代表の幽香・リグルペアが鏖を削っていた。

『キリキザン、〃つじぎり〃!』

『ダゲキ、〃ストーンエッジ〃で連携攻撃よ!』

『ビビちゃん、〃まもる〃!』

『タケりん、〃キノコのほうし〃』

中継によって映し出される画面の中では、どうやら幽香とリグルが優勢のようだ。

「ふむ、〃ふくがん〃のビビヨンか。〃ねむりごな〃が良く当たる」

「攻守交替のスイッチが上手ね。幽香が合わせているんでしょうけど、リグル・ナイトバグもリグル・ナイトバグで上手く切り替えてる」

リグルが操る蝶型のポケモン、ビビヨンは特性「ふくがん」で技が普通より当たりやすい。命中精度に難がある〃ねむりごな〃を使つて今も上手く咲夜の青いキリキザンを眠らせてしまった。

西洋鎧を纏った武人の隣で、空手着の戦士が必死にフォローしているが、ジリ貧なのは明白だ。

『キリキザン、起きて! 起きなさい!』

『今だよビビちゃん、キリキザンに“むしのさざめき”！』

『させない！ ダゲキ、もう1度“ストーンエッジ”！』

『タケりん、“いかりのこな”！』

「しかしあのモロバレル、凄い耐久力だな。これまでに3度は攻撃を受けているのにまだ耐えている」

「持ち物は“くろいヘドロ”かしら。とすると交替前提の“さいせいりよく”持ちね」

幽香の操るキノコ型のポケモン、モロバレルが使った技“いかりのこな”は自分に集中を向けさせて攻撃を誘導する効果を持つ、パートナーをサポートするための技。耐久の低いビビオンをこれで守りつつ、毒タイプ専用の永続回復アイテム“くろいヘドロ”で耐久力を高めているのだ。

「しかし“くろいヘドロ”は地味に凄いね。“たべのこし”と違って奪われても回復されない」

「他のタイプが持てばスリップダメージ（ターン毎に重なっていくダメージの事）にしかありませんから。あ、そろそろ決着よ」

『“ねむりごな”！』

緑色の鱗粉を吸い込み、キリキザン同様に倒れたダゲキ。これで紅魔の従者達のポケモンは2体とも眠ってしまった。

『フィニッシュ行くわよ、リグル！ “ギガドレイン”！』

『はい！ ビビちゃん、全力で“むしのさざめき”！』

そのまま体力を奪われるダゲキと、音の攻撃で吹き飛ぶキリキザン。攻撃終了と同時に2匹の体力は尽きた。

『キリキザンとダゲキ、戦闘不能！ よってモロバレルとビビオンの勝ち！』

『決着ッ！ 巧みに相手を眠らせるというイヤガラセのような戦術で、紅魔ペアを成す術無く下したUSC！ 彼女は兎も角、果敢に戦った小さな蛍の少女に、盛大なる拍手を!!』

『おいコラそこのキツネエ！ 司会がヒトをこき下ろしてんじゃないわよね!』

「酷い言われようだね……」

「ま、あんな戦術ではね。ブーイングが来ないだけマシですわ」

「それはそうだが……」

さて、と霖之助は立ち上がった。

「あら、どちらへ？ 次の里の八百屋の息子さんと、婚約者の居酒屋の一人娘さんのバトルが始まるのに」

「相手は宇佐見君と早苗だろうか？ だったら勝敗は見えてるよ」

言うが早いか、眼鏡の相棒はスタスタとスタジアムへ続く通路へ歩いて行ってしまった。

『グライオン！』

『メタグロス！』

『君に決めた!!』』

『早苗選手はグライオン、董子選手はメタグロスで勝負に来ました。しかもこのメタグロス、色違いの銀色です！』

奇妙に思った紫はこっそりとスキマで覗いて後を追う。画面では人里のカップルがメガヤンマとマンムーを繰り出したがお構い無しだ。

果たして、その答えはすぐに分かった。

『皆、頑張ったね』

左から順に霊夢、魔理沙、こころ、朱鷺子。4人が勝利と今後の健闘をそれぞれ称えられる形で、彼の大きな腕で抱き締められていたのだから。

それを覗き続けるのは無粋。静かに紫は、スキマを閉じたのであった。

ほんのちよつとだけ、羨ましいと思いつつながら。

つづく

### その3

『激戦が続くタッグバトル・トーナメント幻想郷大会！ 第3試合、早苗選手と董子選手の勝利です！』

「やりました！」

「やった！」

「イエーイ！」

一度は特性“かそく”で早苗のグライオンが撃墜されるも、董子のメタグロスが上手くフォローに入った。

そのままグライオン“どくどく”のダメージが重なり、メタグロスのパワーも相俟って無事に勝利を獲得できたのであった。

……ただし観客からはブーイングの嵐である。

「あの、やっぱり無限グライオンはやめた方が」

「ですよー……」

理由は早苗の取った戦術にある。

早苗のグライオンが取ったタクティクスは通称【無限グライオン】と呼ばれる嫌がらせにも等しい方法だ。

彼女のグライオンの特性“ポイズンヒール”は毒状態になるとダメージを受けずに回復するというもの。持たせる事で自動的に毒状態になるアイテム“どくどくだま”で毒状態を促し永続的に回復すると同時に、火傷や眠り状態になるのを防ぐオマケもある。

後は“みがわり”と“まもる”でダメージを受け流しつつ、“どくどく”“じしん”“ハサミギロチン”などで相手を倒していけば、グライオン1体だけで完封勝ちも可能なのだ。

無論、逃げてばかりの戦術として受け取られるため、相手からしてみれば面白くない。観客からも卑怯者としか映らなかつた事だろう。

「幻想郷じゃ常識に囚われてはいけないのですよー」

「信仰が減ってもっ」

「……………」

「……………」

「……………自重します」

ちなみにリアルでも高確率で勝ちを狙えるが、当然嫌がられる。

☆

さて実はこの大会、会場が2つある。

人里の広場を使うAブロック、そして中央通りを利用したBブロックである。前者は勿論、後者も最低限弾幕ごっこを行う程度には十分な広さがあるため、大会の実行には困らない。

Aブロックと同時進行で行われているBブロックでは、既に第3試合が繰り広げられていた。

『ベロリンガ、だくりゆう』よ』

『カブトプス、がんせきふうじ』！』

第3試合、赤コーナーで猛攻を続けているのは白玉楼代表の幽々子と妖夢、そして彼女らが操るベロリンガとカブトプスだ。

『ユレイドル、耐えて！』

『オニゴリー、受け身を取って！』

相対するは月都からの特別ゲストのサグメと、無理矢理パートナーにされたレティ。それぞれユレイドルとオニゴリーを駆使して必死に食いついている。

ちなみにサグメの能力だが、電腦空間では影響を及ぼさないらしく、思う存分喋って貰っている。

『れいとうビーム』

『あらあら。それならこちらもれいとうビーム』

『オオニゴオツ！』

『ベロオツ！』

幽々子の操るベロリンガは非常に鈍重で、一見するとパツとしないポケモンだ。

しかし彼女が持たせたアイテム『しんかのきせき』は進化前のポケモンに持たせる事で防御と特防を1.5倍にする。これによりベロベルトの進化前のベロリンガはノーマルタイプでありながらも相当な耐久力を得た。弱点のタイプが1つしか無い事がそれを手助け

している。

そしてその肝心の鈍さをカバーするのが妖夢のカブトプスだ。

『ユレイドル、ストーンエッジ！』

『きりさく！』

両手の鎌を縦横無尽に振るい、岩の壁を切り刻むカブトプス。事前に「つるぎのまい」で攻撃力を跳ね上げておいたお陰でパワーに困る事が無い。

『っ、エナジーボール！』

『ハイドロポンプ！』

激流がエネルギー弾を弾き飛ばし、ユレイドルの体力を大きく削る。

予め「ねをはる」で体力を回復し続けているが、そろそろ限界のようだ。

『決めるわよ、妖夢。ベロリンガ、かえんほうしゃ』

『御意のままに！カブトプス、はかいこうせん！』

決まったな、と霖之助と紫はモニターを見ていて思った。

その確信の通り、レテイのオニゴリは炎で焼かれ、サグメのユレイドルは強烈なビームに耐え切れず、ダウンしてしまった。

『オニゴリとユレイドル、戦闘不能。よってベロリンガとカブトプスの勝ち！』

『決ツ着ッ！ 第3試合は白玉楼の主従が勝利をもぎ取ったあ！やはり即席の絆では無理があったかっ！』

それを言ったらこっちも即席だ、と司会のマミゾウのセリフに霖之助と紫は苦笑する。

審判役を押し付けられたアリスもまた、そんな狸の大将の言葉に苦笑いしていた。

「これでA・Bブロック共に、残り試合数は1つずつ。初日のトリを飾れるとは、何とも贅沢だね」

「あら、緊張してるのかしら？」

「まさか。何せ僕には最強にして無敵のパートナーがついているからね。水面のように落ち着いている」

Aブロック第1試合。娘組と妹組の戦いは、激闘の末に妹組の勝利。

第2試合。紅魔の従者達と緑髪のコンビは、危なげ無く幽香とリグルが相手を下した。

第3試合。JK（早苗は怪しいが）の2人組が里のカップルを撃破。

「それを言うなら、私もまた最強の相棒がいますわ。優勝は確実よ」

「僕が最強？ ハハハ、冗談」

「いえいえ。貴方の実力は保証します。他の優勝候補達と遜色無いでしょう」

Bブロック第1試合。正邪・こいしペアとチルノ・大妖精ペア。カラムネロとギルガルドという悪人丸出しのコンビに、ラプラスとフラージエスで立ち向かうも、正邪とこいしに軍配が上がった。

『ヒャーハハア！ これで終わりだぜ、サイコカッター！』

『アアアアアーンヘエーツド！』

『サイコカッター』と『アイアンヘッド』がクリーンヒットオ！

これは耐えられないっ！』

第2試合。慧音・妹紅ペアvs衣玖・ヘカーティアペアという異色のコンビ。バッフロンとブーバーンという予選をその2体だけで勝ち抜いて来た2人の実力は本物であり、ボーマンダとナツシーを難無く撃沈させ、即席コンビを倒した。

『やったね、慧音！』

『うむ！ これで霖之助達との闘いに一歩前進だ！』

『決まりました！ 予選をこの2体のみで勝ち進んだ強豪コンビ！』

その破壊力の前に敵は無しっ！！』

そして今の第3試合が終了。幽々子と妖夢がカメラに向けて笑顔を送っている。

「さて、いよいよ」

「私達の出番ね」

ゆっくりと2人は立ち上がり、大通りのスタジアムに向かう。

対戦表によれば、自分達の相手は――

『さあ皆様、お待たせしました。この夕焼けに照らされるスタジアム、



本日最後の試合を迎えようとしています。赤コーナーからは命蓮寺・神霊廟合同予選より、白蓮選手と神子選手の登場ですっ!』

そう、白蓮と神子だ。

どちらも異変解決に自ら乗り出す程の猛者であり、その精神・肉体共に幻想郷の中でも群を抜いた熟練の戦士である。恐らくだが、こころ伝手にこちらの戦法が伝わっている可能性が高い。

『そして青コーナー! 今大会の企画者にしてポケモンブームの火付け役、紫選手! そしてその相棒、相談窓口を引き受けさせられた霖之助選手の入場です!』

だが、何も恐れる必要は無い。

自分の隣にいるのは妖怪の賢者、幻想郷最強と言っても過言では無い存在が味方なのだ。そう考えれば、不思議と勇気が湧いてくるというものである。

「さて、腹は括ったわね?」

「そんなもの、控室に入った時点で括ってる」

「それは重畳」

今は、観客の歓声も心地良い。

やるべき事も、戦術も決まっているのだ。後はそれを恙無く実行して勝利するのみ。

「こんばんは、霖之助さん、紫さん。良いバトルにしましょうね」

「正々堂々の勝負、さあ! いぎ、いぎ、いぎっ!」

「はい、こんばんは。悔いの残らないバトルにしましょう」

「……神子、ちよつと君ここに似てきてないか?」

『それでは両者、ポケモンを出して下さい!』

腰にセットしてあるボールを手取る。スイッチを押せば小さかった待機状態が解除されて本来のサイズになり、後は投げれば良いだけだ。

チラリ、とお互いに目配せ。大丈夫、作戦は頭に入っている。

「サーナイト、行って貰います!」

「ヨルノズク、君の出番だ!」

「ホセ、バトルスタンバイ!」

「クリームゾン、お願いします！」

『サアツ！』

『ホホオーウツ！』

『ボオオオオツ！』

『ゴジョオツ！』

放たれたボールから白い光が飛び出し、ポケモンの形を作る。

白蓮が出したのは白い人型、サーナイト。特殊能力が高いエスパータイプだ。ただし物理ステータスが低いという欠点がある。

神子が選んだのはフクロウ型のヨルノズク。飛行タイプでありながらエスパー技を豊富に覚え、特殊耐久にも優れる。

霖之助が相棒に選んだのは金属で覆われた巨体、ボスゴドラ。極めて頑丈なポケモンであり、生半可な物理攻撃ではビクともしない。

紫はカンフーのようなポーズを取るイタチ型のゴジヨンド。攻撃のステータスはズバ抜けているワケでは無いが、格闘タイプ随一のスピードがある。

ジリ、とお互い夕焼けに照らされながら睨み合う。

乾いた風が吹く中、審判の開始合図を今か今かと待つ。

互いに気迫は十二分、後はトレーナーの指示次第である。

「それではバトル……、開始っ！」

☆

合図を聞くや否や、先に動いたのは白蓮と神子だ。

「先手必勝！ サーナイト！」

「先んずれば人を制す、ヨルノズク！」

「『サイコキネシス』！」

『まずは『サイコキネシス』をダブルで放った！ これはいきなりボスゴドラがピンチか!』

2体同時に放たれる念力の波動攻撃。特殊防御力の低いボスゴドラにヒットすれば致命傷は確実だ。

「紫！」

「はいは〜い。クリムゾン、サーナイトに『ねごだまし』よ♪」  
『ゴジョオツ!』

ただしそれは「高威力で命中」すればの話。

紫が指示した『ねごだまし』のエフェクトでサーナイトは驚き、攻撃を中断してしまった。

「怯んだ!?!」

「だが私のヨルノズクの攻撃は止まらない!」

「構わないさ、受け止めろ!」

『ボオツ!』

両手をクロスして思念の波動を受け止めるボスゴドラのホセ。ものの見事に直撃したものの、ただの1ミリすら後退させる事は出来なかった。

『ドラァ……』

「何っ!?!」

『あぁつと、全く効いてない! ボスゴドラ、不敵な笑みを浮かべた余裕の表情です!』

「鋼タイプにエスパ―技の通りは薄い。この程度ならもう4〜5発は楽に耐えられるよ」

「言ってくれる……!」

更に霖之助は言わなかったが、ボスゴドラには『とつげきチョッキ』というアイテムを持たせてある。変化技を使用不能にする代わりに、特防を5割増しにする防御プロテクターだ。これでボスゴドラは文字通り要塞と化した。生半可な攻撃ではビクともしない。

「さあ、今度はこちらの番だ! ホセ!」

「クリムゾン、合わせて! セーの!」

「『いわなだれ』!」

『ドラァァァァ!』

『ゴジョオオオツ!』

攻め手が変わって霖之助と紫は上空から岩の雨を降らせる。相手2体を同時攻撃でき、怯みの追加効果も期待できる岩タイプの上位技である。

無論、防御力の低いサーナイトや飛行タイプのヨルノズクが受ければ最善で致命傷は免れない。

「サーナイト、〃まもる〃！」

「ヨルノズク、サーナイトの近くに！」

『フホオオオッ！』

『サアアア、ナアアイッ！』

そのため防御するべくバリアを張るよう白蓮は指示。本来ならば自分だけを保護する技〃まもる〃も味方を巻き込んで発動させる事により同時にガードが可能だ。

『反撃の〃いわなだれ〃、防がれたっ！』

「残念でした、ダメージは通りませんよ」

「悪いが僕らの狙いは」

「そこじやありませんの」

「何!？」

岩の雨が終わり、バリアも消滅。再度攻撃へ転じようとした白蓮と神子は2人の狙いを知った。

「これは!？」

「岩に囲まれてサーナイトが動けない!？」

〃まもる〃は確かにほぼ完全に攻撃を凌ぎ切れる防御技だ。しかしバリアという安全地帯以外は干渉しない性質を逆手に取られ、周囲を岩の壁にされてしまった。飛行能力を持たないサーナイトは、これでは脱出できない。下手に動けば的になるだけである。

「ホセ、アタックチャンスだ！　〃アイアンヘッド〃！」

「クリムゾン、続いて！」

『ボオオオス、ゴオドラアアアアアアアアアアアッ！』

金属質の頭突きで岩の壁を貫き、サーナイトへ一直線に突撃するボスゴドラ。主食は鉄、角で岩盤を砕くという性質故に、岩の壁など何の障害にもならないのだ。

「させるか！　ヨルノズク、〃さいみんじゅつ〃で動きを止めろ！」

「させるか、は私のセリフよ。クリムゾン、〃とびひざげり〃！」

『ジヨオオンドッ！』

『フウフオオオッ?!』

睡眠を誘発する念波で妨害を試みるヨルノズクだったが、勢いをつけた膝蹴りにより体勢を崩され失敗に終わる。

『ヨルノズク、カバー失敗! コジヨンドの“とびひざげり”がクリーンヒットオ!』

「私のコジヨンドのクリムゾン、特性は“すてみ”。反動の発生する技の威力が高くなります。もともと、適合するのは“とびげり”と“とびひざげり”だけです」

しかし攻撃を妨害させないという目論見は成功。ボスゴドラの鋼鉄の突貫は既にサーナイトの目の前にまで迫っていた。

「ヨルノズク、立て直せ! “リフレクター”だ!」

『フオオオッ!』

辛うじて持ち直すヨルノズク。物理技のダメージを半減するバリアを張り、サーナイトの耐久力向上に貢献を狙う。

だが。

『ドラアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

『サナアアアアアアアアアッ!』

「サーナイト!!」

『決まったあ! 効果は抜群だ! 岩で逃げ場を失ったサーナイト、成す術無く吹き飛ぶ!!』

200kgを超える超重量級の頭突きが炸裂。サーナイトは見事に吹き飛ばされ、目を回して倒れてしまった。

「……サーナイト、戦闘不能!」

エスパークタイプの他にフェアリータイプを持っている事が今回は災いしてしまった。強力なドラゴン技を完全に遮断する代わりに、鋼という元々苦手だったタイプに更に弱くなってしまったのだから。

「ありがとうございます、サーナイト」

「くっ、これで2対1か……」

ボールに戻るサーナイトを見送りながら、神子は歯噛みした。

強烈な物理技を使うコジヨンドに、有効打を与えられる技が無いボスゴドラ。ハッキリ言って敗北色濃厚である。

「ならば先にスピードのある方を倒し、上空から爆撃あるのみ！ ヨルノズク、コジヨンドに“サイコキネシス”！」

「クリムゾン、ボスゴドラの後ろへ」

「ホセ、ガードだ！」

苦し紛れに念力の波動を放つが、ボスゴドラが盾になりコジヨンドには届かない。

これが2人の立てた作戦。重量級のポケモンを多く操る霖之助が、軽量級の紫のポケモンの盾になる。攻める時は紫から霖之助の順に、守る時は霖之助が盾となり紫がそれをサポートする。攻防のテンポを合わせるといふ、ダブルバトルでは基本中の基本にして最も重大な戦術だ。

『“サイコキネシス”、ボスゴドラに阻まれ届かずっ！ その鉄壁さはまさに要塞っ！』

「ボスゴドラを踏み台になさい。クリムゾン、”どくづき”」  
『コ、ジョッ！』

そして重量級という事は体が大きいという事でもある。

ボスゴドラの頭をジャンプ台にコジヨンドは空高く跳躍、猛毒のエネルギーを溜めた突きで狙う。

「躲せ、ヨルノズク！」

『フオオオオッ！』

間一髪で緊急回避に成功するヨルノズク。だが空中で攻撃を避けられる事など、紫にとっては想定内だ。

「逃がさず再び”どくづき”！」

『ジョンドオッ！』

『フオオオオオッ！』

「よ、ヨルノズク!？」

『伸びたー！ コジヨンド、長い腕の毛を生かしてヨルノズクを逃がしません！』

見た目から間違われる事が多いのだが、コジヨンドの腕は実は非常に短い。外から見て腕だと思っているのは長くしなつた体毛である。故にある程度の制動の自由が利き、回転を交える事でリーチを伸ばし

つつ追撃を放てるのだ。

「立て直せヨルノズクッ！ ボスゴドラに狙われるぞ！」

「霖之助さん、お願いしますわ」

「ああ。ホセ、＼れいとうパンチ＼！」

『ボオオオオオオオオッ！』

強烈な冷気を腕に纏って突撃していくボスゴドラ。対するヨルノズクはダメージのせいでまだ姿勢の制御が覚束無い。

「くっ、＼ゴッドバード＼で迎え撃て！」

「遅い！」

『ドラアッ！』

『フオオオオオオオオオオッ!!?』

そのまま冷たい鉄拳を浴びせられ、ヨルノズクもまた地面に倒れてしまった。

元々防御力の低いヨルノズク、＼リフレクター＼越してもボスゴドラの体重の乗った一撃は耐えられなかったようだ。

「ヨルノズク、戦闘不能！ よってコジヨンドとボスゴドラの勝ち！」

『K・O・！ ボスゴドラの鉄拳がヨルノズクをバトルフィールドに沈めたあ！ これでBブロック初日、全ての試合が決着しましたあ！』

☆

「えー、それでは皆様。タッグバトル・トーナメント幻想郷大会の初日終了の健闘を祝しまして、乾杯!!」

『『かんぱあ〜い!』』

博麗神社と聞けば、誰もがこう答えるだろう。『妖怪神社』と。

そのあだ名の通り妖怪少女が多数現れるという、何とも霊夢泣かせの実態である。

今も初日の勝利を祝し、また敗退を慰問する形で細やかな酒宴が開かれているのだから。

「はーい、霖之助さん、飲んでますう？」

「ちびちびとだけどね」

「チビって言うなー！」

「なー！」

自分の背丈を気にしているであろう、霖之助の言葉に過剰反応した魔理沙と朱鷺子。そんな可愛い妹分と娘代わりの少女を宥める霖之助を微笑ましく見守りながら、紫は視線をゆっくりと動かす。

「お疲れ様です」

「はい、お疲れ様でした」

その視線の先にいたのはAブロック第4試合で敗退した鈴奈庵の一人娘・本居小鈴と、タッグパートナーをしていたシヨタもとい人間の少年に化けた妖怪狐の子供。偽名を使って潜り込んでいたようだが、紫を騙すには格が違いすぎた。

(……まあ、悪さするような精神年齢でも無いから良いんだけどね)

元々が勉強したいがための潜入。いつか人間に存在がシフトしてしまうのかも知れないが、それでも今はまだ動くべき時では無い。

問題はその2人の奥に陣取っている、Aブロック第4試合の勝利チーム。

「うまうま。これ美味しい！」

「寺じゃ、んぐ、肉も酒も、はむっ、食べられないから、もぐもぐ、今の内に、あぐぐ、食い溜めしておかないと、ごくん」

片方は特徴的な翼を持つ黒髪の少女、封獣ぬえ。1回戦ではカバルドンを繰り出していた。体色が黄色では無く黒だったので、あの個性はメスだ。

そしてその相棒。

赤と白のストライプ、青地に白の星。星条旗を思わせるデザインの服を身に着けている少女、クラウンピース。主のヘカーティアに反し、1回戦を無事に勝ち抜いた最強の妖精である。

(彼女達、かしらね)

無論、まだ証拠は無い。あくまでも見当がついているだけだ。

しかしながら紫は、もう少し泳がせれば尻尾を出すと確信していた。



この先、トーナメントが進めばより強い相手と戦う。ならば他人から貰ったという、普通より強くなりやすいポケモンで戦う事を誘発しやすくする。

電脳空間で出したポケモンの全てのデータはこちら側で管理されている。ポケモンの種類とIDが被害届と合致すればそこでお縄だ。(ま、捕まえるのは大会が終わってからにしましょう。皆楽しんでる事だし)

それにこれは推測でしかない。もし犯人が別にいたら、彼女達に割いた労力が無駄になる。

何より……もう少し、自分もポケモンバトルを楽しみたい。

「さあ、ここで一回戦のハイライトです！」

香霖堂からツケで持つて行かれた8台のテレビにそれぞれ映し出される、今回の試合。こうして後から岡目八目で見てみると、自分の指示も改善点が分かるというものだ。

勝利したチームは各々が「あそこであすりや良かった」という感想を抱き、相棒と意見交換に入る。が、紫の視線は当然ながらクラウンピースとぬえの試合に釘付けである。

『カバルドン、ストーンエッジ』から『はかいこうせん』！』

『ソルロック、めいそう』で凌いで『サイコショック』！』

(ふうん、粗削りだけど良い腕ね)

息の合い具合なら両者は互角。だが本当に幼い小鈴・子狐ペアに対し、それこそ海千山千の妖怪と妖精だ。戦術の引き出しの数が違う。ジリジリと追い詰められ、怒涛の破壊力で勝利を奪っている。

幸か不幸か、彼女達が所属しているのはAブロック。自分達がいるのはBブロックなので、決勝まで勝ち進まなければバトルする事は出来ない。そしてその前に立ちはだかるのは恐らく霊夢と魔理沙のペアだ。幽香とリグルかも知れないが、何方にせよ勝利するのは容易じゃない相手が待つ。

(そこで負けてくれれば万々歳。勝ってこっちに来るなら……)

懐からゲーム機を取り出し、画面を操作する。

手持ちの内の1体のステータス画面を開くと、紫は小さく微笑ん

だ。

(大人げないけど、この子の出番になるわね)

手にしたお猪口を煽ると、紫は明日の作戦会議を行うべく、霖之助の隣に座りなおす事にしたのだった。

つづく

## その4

大会は全部で3日に分けて行われる。今日はその真ん中、2日目にあたる戦い。朝から観客が大勢集まり、その盛況具合たるや香霖堂が何十年かけてもまだ足りない程ではないかという程である。

……泣いてない。泣いてなんかいない。

『おはようございまーす！ 皆様、昨晩は如何お過ごしでしたでしょうか！ 本日も司会を務めさせて頂きます、八雲藍です！』

さて、この大会は2日目になるとあるものが解禁される。それはメガシンカだ。

絆の力でステータスを跳ね上げるメガシンカだが、1度のバトルで1回しか使えない制限がある。当然、トレーナー2人なら2回だ。

2回戦ではどちらか一方のトレーナーだけがメガシンカを行える制限解除が行われる。

それと同時に、トレーナー1人が試合で使用できるポケモンが2体ずつとなり、1度のバトルで1チーム合計4匹を繰り出せる事となった。

これによりメガシンカによる一発逆転を可能にすると同時、物量でメガシンカポケモンを倒す策も取れるようになったのだ。

「絶対急所にあたる『つじぎり』をお見舞いしてやれ！」

「『だいもんじ』で焼き払いなさい！」

「ウルガモス、ドダイトス、戦闘不能！」

『決まったあー！ ザングースとドンカラスの連携攻撃が華麗に相手を打ち倒しましたっ！』

ほかほかとした陽気が降り注ぐ中で行われた2日目のAブロック第1試合。灼熱に滾る闘志を燃やしてぶつかるのは霊夢・魔理沙ペアと、幽香・リグルペア。

速攻を得意とする2体を相手に、手傷を負わせたものの、幽香とリグルは早速1匹ずつ失っていた。電光掲示板の手持ちの画像が、灰色に変わる。

「ありがとう、るーくん」

「お疲れ様、カメリン」

ふう、と溜息一つ。速度で分が悪いだろうと思ったが、まさかここまでやられるとは。

ここで負けて良いような特訓は、自分もリグルもしていない。もう退けない事をお互い頷き合って再確認。後は残る全力をぶつけて、ここから逆転を目指すのみ。

「じゃ、やりましょう幽香さん」

「ええ。ちよつとマジな本気、出しちやおうかしら」

「せえーのっ!!」

「ドラくん!」

「フシりん!」

『ドツラアアアアアアアッ!』

『フシイイイイイイッ!!』

掛け声を合わせ、続けて出された2匹目のポケモン達。

リグルが繰り出したのは毒タイプのパワーファイター、ドラピオン。幽香は大輪の花を背負うフシギバナだ。

無論、これだけでは終わらない。幽香はスカーフの裏側に手を入れると、そこから淡く輝く宝石を取り出した。

「取って置ききの秘密兵器、サービスしてあげるんだから」

宝石を指でつまんだ幽香は、そこに軽く口付けを落とす。

そして妖しい微笑みを浮かべると、声高々に宣言した。

「我が心に答えよキーストーン! フシギバナナイトの煌めきと共鳴せよ!」

途端、石とフシギバナから延びる無数の光の帯。それら一つ一つが結びつき、より強い輝きを放つ。

「一・碧・万・頃! フシギバナ、メガシンカアッ!!」

共鳴の言葉通りに光が鼓動し、やがてそこには、今までよりも更なる力を得たフシギバナ、メガフシギバナがいた。

『バナアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

『出ました、メガシンカア! 2回戦から解禁されたメガシンカ、早速使って頂きました! これは逆転もあるか!』

フシギバナはメガシンカすると特性が「あついしぼう」に変わり、炎と氷タイプのダメージを半減する。どちらも弱点であるフシギバナにとつては非常に有難い効果を持つのだ。

「さ、アイツらぶつ飛ばすわよ、フシリん！」

「ドラくん、ここから逆転だよー！」

「魔理沙、腹括りなさい。あっちも本気よ！」

「おうとも、百も承知だぜ！」

いざとなつたら、と霊夢と魔理沙は身構える。

各々のキーストーンが、仕舞つた位置にちゃんとあるか確かめながら。

☆

ドガアアアアアアアアアアアアアアアンツツツ！！

天に轟け、地よ割れると言わんばかりの轟音と爆風がフィールド内を掻き乱し蹂躪する。ノーマルタイプの大技「だいばくはつ」は自分の残る全ての体力と引き換えにありとあらゆるポケモンを焼き払う、文字通り決死の自爆技なのだ。

『決まったあ、正邪選手のパルシエンの「だいばくはつ」っ！ バツフロンもブーバーンも、これは耐えられないっ！！』

「バツフロンツツ！！」

「ブーバーン！！」

己のポケモンの名を呼ぶ慧音と妹紅。予選からここまで彼ら一匹で勝ち進んで来た、相棒とも呼べる存在を。

爆発の煙が晴れば、そこに残るのは一匹のポケモン、ギルガルドのみ。こいしのギルガルドは鋼タイプにゴーストタイプを併せ持つため、「だいばくはつ」のダメージを受けないのである。

「キシシ、お疲れさんパルシエン。十分役目を果たしてくれませ」

ボールに目を回す2枚貝のポケモンを戻しながら、正邪は笑う。

パルシエンに覚えさせていた技の1つ、「からをやぶる」は防御能力を捨てて攻撃面と速度に割り振る効果を持つ。元々そこそこの速

さと攻撃力を備えていた。パルシエンが使用すれば、物理受けでも無い限り「だいたくはつ」を耐え切るのは難しいのだ。

「勝利が見えるよ、やったね正邪ちゃん！」

「おいやめろ」

『マネマネ〜ロ……』

危険なワードをほざくこいしにツツコミを入れつつ、次のボールに手を伸ばしてカラマネロを繰り出す正邪。これで数は3対2になり慧音・妹紅ペアは不利。

この戦いに勝利できなければ、次の試合で霖之助・紫ペアと戦うという目標が達成できなくなってしまう。

「悩んでるヒマは無いよ、慧音。プランはどっちで行く？」

「Aで行こう。妹紅、頼む」

「あいよ」

油断をしていたつもりは無かった。つまりそれだけ、正邪とこいしが強いという事。ならば全力でぶつかり、勝利をもぎ取るしか無い。幸いリード差は1匹、まだ何とかなる。

「いっけえええええ、バシャーモ!!」

「ミミツキユ、お前の出番だあっ!!」

『バツシヤアアアアアアアア!!』

『キュイイイイイイイイ!!』

勝負をかける、2匹目達。妹紅は猛禽類の羽を燃やす格闘士、バシャーモ。慧音はピカチュウを真似した姿を持つというミミツキユだ。なおピカチュウに似せてはいるものの、タイプは電気では無くゴーストとフェアリーであり、体長も半分の20cmしかない。

妹紅はモンペのポケットに手を入れると、あるものを中から取り出す。DNAの螺旋構造の一部を切り取ったような、或いは横向きの葉脈を持つ葉のような模様が刻まれた石。キーストーンだ。

指輪型に改造してあるそれに手を被せて祈るように目を瞑り、それを高々と空へ掲げる。

「我が心に応えよ、キーストーン！ バシャーモナイトの光と共鳴せよ！」



『ゲンガーとブリガロン、戦闘不能！ よってゲンガーとピクシーの勝ち！』

『決着ウ！ これでAブロック準々決勝は、ぬえ選手とクラウンピース選手が勝ち抜いた！ やはりメガシンカは強かったあー！』

『くっ、負けたあ……』

『あー、ここで敗退かあ』

敗北という現実を突きつけられ、膝をつくJKコンビ。ぬえのゲンガーがメガゲンガーにメガシンカした事で形勢の逆転も狙えず、ジリ貧となって負けてしまったのだ。

『すみません、メタグロスが耐えられれば良かったんですけど……』

『仕方ありませんよ、こちらもワンパンで沈められてしまいましたから』

ぬえが最初に繰り出したのはゲンガー、ゴーストと毒タイプの素早いポケモンだが、代わりに防御が低い。だからこそ董子はメタグロスの“しねんのずつき”で沈めようと思ったのだが。

『き、効いてない!?!』

『違う、あれはゲンガーじゃない!!』

ぬえが本当に繰り出していたのはゾロアークという黒い狐のようなポケモン。その特性は“イリュージョン”と言って、姿を手持ちの別のポケモンに変化させるというもの。当然、タイプは本来の悪から変化していないため、エスパータイプの技は効かない。

反撃に放った効果抜群かつタイプ一致の“つじぎり”で敢え無くメタグロスはダウン。戦線が瓦解し、立て直せなかった次第である。

『これで……、私達だけになりましたね』

『ああ』

2人きりの控室に、紫の底知れぬ恐ろしさを含んだ声が響く。

今日の午前中に残された試合は1つ、自分達のだけだ。

『作戦はどうする?』

『昨日と同じで良いかと。相手は幽々子と妖夢、いい加減な戦術では倒せません』

『だろっね。とは言え、向こうもそれは承知だ。だから……』



「ええ、その辺も昨晚の打ち合わせ通りに。そう、打ち合わせ（意味深）の通りに」

「口で『括弧意味深』なんて言うのは君ぐらいだろうね」

電光掲示板に表示される、これまでの3つの試合のハイライト。誰も彼もが仰天の戦術や抜群の連携を見せて鎬を削り合い、勝利へ喰らいついて来た。

自分は冷めた性格だと、霖之助も紫も思ってきていたが、どうやらそれは間違いだったらしい。何故なら彼女らの試合を見て、今こんなにも血が騒ぎ胸が躍っているのだから。腕が鳴るとはこの事か。

「じゃ、やろうか」

「はい、やりましょう」

昨日の相手の戦術は自分達と同じ、前衛と後衛という役割分担タイプ。

そうだった場合に立てられる戦術は前衛を速攻で倒す事。後衛へ2体で攻撃を集中させれば、如何に重量級のタンクでも耐えきれぬものじゃない。ましてや速攻型、特に妖夢のように素直さが前面に出やすい子なら、スピードとパワーに能力値を振ってある可能性は高い。だが、あの西行寺幽々子がそんな定石が通じる相手だろうか。妖夢は兎も角。

彼女は少ないピースから異変の全貌を見抜いたり、紫と阿吽の呼吸で行動できる古強者。何かあつと言わせるような策が必要だろう。

そのためのポケモンは、用意してある。後は紫頼みだ。

☆

『大会2日目、午前の部もいよいよラストバトル！ Bブロック第2試合が始まります!!』

通路を出てスタジアムに足を踏み入れれば、相変わらず耳を劈くような歓声が響く。紫ならともかく喧噪を好まない霖之助は少しだけ顔を顰めた。

『赤コーナー！ 一回戦では見事な連携プレーを發揮し、ほぼ無傷で

勝利をもぎ取った西行寺幽々子&魂魄妖夢ペア！ 皆様、拍手でお出迎え下さい！』

「わ、わわ、昨日より声が凄いです」

「ふふ、頑張りましょうね、妖夢」

戸惑ったのは向こう側にいる妖夢も同じらしい。生き残った組が減った事で自分達を応援する人が増えたのだ、歓声が増えるのは当然である。

『そして青コーナー！ 鉄壁の要塞と一閃の迫撃、その有無を言わさない破壊力と防御力は皆様もご存じでしょう、森近霖之助&八雲紫ペアです！』

「紫、準備は？」

「いつでもどうぞ」

ふうーっ、と強く息を吐く。半人前とは言え、バツクに幽々子がいでは手落ちを期待は出来ない。全力を叩き込み、勝利を狙うのみ。

『それでは両者、ポケモンを！』

「行け、カブトプス！」

「ベロリンガ、出会え！」

「ニーチェ、バトルスタンバイ！」

「クリムゾン、行つて貰います！」

『カアブスッ！』

『ペロオ〜！』

『ニイドオオオオ！』

『コジョオツ！』

取り出したボールから出て来る、今回の試合を任せる仲間達。

妖夢と幽々子の一番手は、昨日と同じカブトプスとベロリンガ。戦術も同じだろう。紫も相変わらずのコジョンドであり、代わり映えない。

一方、霖之助が繰り出したのは紫の体に毒の棘を持つポケモン、ニドキング。パワーについては申し分無く、覚える技も豊富なのだが、ボスゴドラと違って防御に向いた能力では無い。

「ニドキング……？ ちよつと霖之助さん！ それ防御に向いたポ

ケモンじゃないですよー!」

「そんな大声出さなくても大丈夫さ、百も承知だよ」

「あらら、紫達はどんな事を企んでるのかしらね」

「フッフ、シヨータイムはこれからよ、幽々子」

四者四様の視線が絡まりあい、緊張感が場に生まれる。息遣い、構え、睨み、そういつた全てが1つになっていくような錯覚の中、観客の応援がどこか遠くへ消えていくような錯覚すら覚える。

上手く行くだろうか、相手はどんな手で来るだろうか。そういつた考えすらも邪魔なものとして消え、ただただ相手の一挙手一投足を見切るための五感がクリアに研ぎ澄まされていく。この清水に浸ったような感覚、堪らない。

『それではバトル……、開始!』

先手必勝、早速妖夢が支持を出した。

「カブトプス、”つるぎのまい”!」

刀剣の舞踊をイメージした踊りで攻撃力を上げて赤いオーラを纏う。これは昨日のと同じだ。

ならば。

「ベロリンガ、”かえんほうしゃ”よ」

やはり、と霖之助は思った。相方のカブトプスは、まず”つるぎのまい”で万全な攻撃力を得てから戦いの場に出る。裏を返すとこれを封じられてしまえば向こうの戦法が成り立たないのである。

ならばそれを理解し、逆手に取らせて頂くとしよう。

「ニーチェ、”どくびし”!」

「クリムゾン、”ねこだまし”で妨害して!」

『キイドオオオオオオオ!』

『ゴ、ツジヨオ!』

相手が補助技を使うならこちらでも使うまで。ニドキングに命じた技”どくびし”は相手の足元に毒のトラップを仕掛け、交代したポケモンに毒を浴びせる技だ。

そしてその分無防備になる所を紫とコジヨンドがカバー。相手を確実に怯ませる技で炎をブロックし、自分達を守った。

『猛烈な炎、防がれたっ！ 先制パンチ失敗です！』

「更に“いわなだれ”！」

「「躲して！」」

続いて岩を雨のように降らせるゴジヨンド。こちらは2体とも回避されてしまった。

「その岩、邪魔ですね。カブトプス、“ぎりさく”！」

「え、ちよつとダメ、妖夢！」

岩の塊はそのまま視界を塞いだり足場を悪くしたりする。動かないペロリンガは兎も角、これから近付こうとしたカブトプスには障害物でしかない。ならばそれらを切り裂き活路を開くのはある意味では間違っていない。

……ある意味では。

斬！ 斬斬！ と岩が次々に切り倒され、カブトプスはあつと言う間に道を作る。ただしそれは、カブトプスの居場所を相手に教える事にも繋がる危険性を孕んでいる事を、妖夢は知らなかった。

「あそこだ、狙いを定めるニーチェ」

『ドオツ！』

鋭い刃で道を開き、勢いそのままにして突撃して来たカブトプス。それを見て霖之助は冷静にニドキングに突撃技を指示する。

「“ぎりさく”！」

「“メガホーン”」

ガギツ！ 衝突は一瞬。中央を一点突破したニドキングはカブトプスの鎌を跳ね飛ばし、ド真ん中に角の一撃をお見舞いしてやった。

『カブウツ!?!』

「な、カブトプス!?!」

「パワー不足だね」

『打ち負けたあ！ カブトプス、ニドキングの角に歯が立ちません！』

「っ、”ハイドロポンプ”！」

「”10まんボルト”」

パワーアップしたハズのカブトプスが力負けした。その事実に着いた妖夢は速攻で片付けるべく、ニドキングに効果抜群の水技を指

示。一方で冷静さを保った霖之助は、同じくカブトプスに効果抜群の電気技を指示。

青白い水流と金色に輝く電撃がぶつかり合うが、これもまたカブトプスが打ち負ける結果に終わった。

『カブトプスオオッ!!?』

『猛烈な電撃が炸裂う！ 効果は抜群だあ!』

「な、なんで……!?!」

「妖夢、〃ハイドロポンプ〃は〃つるぎのまい〃の強化の影響を受けないよ」

「っ、バカにしないで！ カブトプス、これじゃあ〃はかいこうせん〃は多分効かない！ 最大パワーで〃きりさく〃!」

「〃だいちのちから〃」

やはり勝負に焦ったな。

霖之助は内心でほくそ笑んだ。真っ直ぐな性格の妖夢なら、力負けすれば確実に焦りが生じると踏んだ。彼女はそうした実戦での本当の悪意に対する耐性が低い。ならば後はそこを突けば良い。

悪く思うな。これもまた戦術なのだ。

『カアアアアアアアア!?!』

「カブトプスッ!!」

「カブトプス、戦闘不能!」

突っ込んで来るならやりやすい。ニドキングに持たせた道具は〃いのちのたま〃。攻撃するたびに体力を1割ずつ削る代わりに技の威力を3割増しにする。

だが霖之助のニーチェの特性は〃ちからづく〃と言って、技の追加効果を犠牲に威力を更に3割増しにする効果を持つ。これで追加効果を持たない〃メガホーン〃を除く2つの攻撃技は追加効果の代わりに威力だけを挙げた事になる。

「くっ、何てパワー……!」

しかしその威力は1.3×1.3で1.69、つまり約1.7倍。

〃つるぎのまい〃でランク補正が2段階アップしたカブトプスは攻撃ステータスが2倍となるためまだ追いつかない。

加えて初期攻撃の種族値はニドキングが102、カブトプスは115と素の攻撃力でも勝っている。

つまり、それでも打ち負けたという事は。

「単純に……、こっちがレベルで負けていた……っ!!」

「そうだ。君のカブトプスのレベルが、パワーで打ち負ける程に僕のニドキングより劣っていたんだ」

「っ！」

屈辱だ。妖夢は歯を軋ませた。

庭師としての仕事の傍ら、彼らと共に強くなった。勿論、まだまだ弱い事ぐらいは知っていた。なのに……。

「よりにもよって貴方に弱者認定されるとか……笑えないんですよっ!!」

心のどこかで見下していたのか、それとも武では自分が勝っている事だけは守りたかったのか、それは分からない。

分からないけど……、このまま負けっぱなしである事だけは許せない。何としてでもあのニドキングは倒す。そのためにやるべきは、ただ1つ！

「行つけええー！ ハッサム!!」

『ハアッサムツツ!!』

カブトプスと交代で出したのは、赤いボディに強靱かつ重量たっぷりなハサミを持つカマキリ型のポケモン、ハッサム。

その特性は「テクニシャン」、弱い技を強くする。「どくびし」が撒かれている以上、毒を受けないこの子で勝負を挑むしかない。

「成程、ハッサムは鋼タイプ。『どくびし』を踏んでも毒にはならない」

「その通り！ ここから全部圧倒してあげますから、覚悟して下さい」

そう叫ぶと、妖夢は伝家の刀に手をかけて鞘ごと引き抜く。鞘の先端には、小さく加工されたキーストーンがはまっていた。

「さあハッサム、行くわよ！ 断ち切れ、鋼の剛刃！ メガシンカアツ!!」

『ハアアアアアサアアアアアアアアアアッ！』

凜と響く少女の雄叫びが眩い光の帯を呼び、ハッサムから伸びた光と結びつく。赤いボディに黒い模様が生まれ、丸かったハサミは重く四角く、その姿をメガハッサムのものへと変えた。

「さあ、お楽しみはこれからです！」

☆

「〃かえんほうしゃ〃！」

「〃とびひざげり〃！」

闘志をメラメラと燃やし、霖之助に啖呵を切った妖夢。しかし彼女は1つ失念していた。それはこれがタッグバトルであるという事だ。盾役ポケモンがいなければ、後衛から砲撃するポケモンは脆さを露呈するしか無いのである。

岩は妖夢を誘い込むと同時に、幽々子のベロリングと分断させる意味もあつた。

『ベエッ！』

『コツジョオオッ！』

『灼熱の〃かえんほうしゃ〃の中を〃とびひざげり〃が突っ切ったー！ ！ ！ ！しかしヒットが浅い！』

幸いにもベロリングの耐久値は高い。しかし格闘タイプのスピードアタッカーが相手では分が悪かった。妖夢が前線で相手を引き付けてこそ幽々子が安全に攻撃できるというのに、である。

「攻めと守りを切り離すなんて意地が悪いわね、紫！ ベロリング、〃はたきおとす〃！」

「乗せられやすい性格を健在にしておくのが悪いのよ！ 〃どくづき〃で迎え撃ちなさい！」

バチバチと技の衝突の応酬が続く旧知の親友同士の激突。ベロリングが遅い事を理解している幽々子は敢えてコジョンドを懐に潜りこませ、自慢の重量とパワーで叩き潰しにかかる。

速度とパワーを潰さないためにも、紫はコジョンドにヒット&ア

ウェイの戦術を指示。打撃の入りが浅くなるが、これで大ダメージを受ける恐れは無い。後はジリ貧で追い詰めれば良いだけだ。

「『いわなだれ』！」

「『だくりゆう』！」

楽しい。

「一気に引き付けて！ 今よ、『はたきおとす』！」

「腕の動きに注意なさい！ 受け流して、『とびひざげり』！」

楽しい！

親友との血沸き肉躍る戦いが楽しくて仕方がない。

互いのポケモンが勝利を目指して邁進する、互いにぶつかり合う強固な肉体と肉体、熾烈な音を立てて空気を裂く技と技！

「『堪らない!!』」

だが、いつまでもそうしているワケにもいかない。これは勝負事、決着はいつかつく。

「決めるわよ、『とびひざげり』！」

「受け止めてー！」

スピードに乗って繰り出される膝打ちの攻撃を、ベロリングは腕を交差して受け止めた。ガード上からでも相当なダメージがあったのか、かなり痛そうに顔を顰めている。

何が狙いかは検討がつく。ならばこのまま押し切るまで！

「一気に決めるわよ！ クリムゾン、『いわなだれ』！」

「『メガホーン』！」

「『バレットパンチ』！」

『ハッサア！』

『ニドオオ!?!』

一方、妖夢が次鋒として繰り出したハッサムは霖之助のニドキングを完全に圧倒していた。

強靱な角の突撃を掻い潜ったハッサムは、速攻の速度で鋼の鉄拳を叩き込む。ニドキングは『メガホーン』のみ、『いのちのたま』の効



果でダメージを受けてしまったため、その分だけ消耗していたのだ。

加えて、メガシンカした事で特製「テクニシャン」はそのままに、元々高い攻撃力が更に上がっている。今度はニドキングが力負けする番だった。

「まだ行けるか、ニーチエ」

『ドォー!』

「よし、だいちのちから」だー!

「躲して「ダブルアタック」!」

ニドキングは地面タイプかつ毒タイプ、鋼技の通りは薄い。

グラついた姿勢を戻し、ニドキングは地面へエナジーを送って下からの攻撃を狙う。

しかしそれより早く動いたハッサムは、目にも止まらぬ速さでハサミを振りかざして一撃を、更に反対のハサミで再び崩れたニドキングにもう一撃をお見舞いしてやった。

『グウ……ッ!?!』

「連続して「バレットパンチ」!」

その隙を逃す程、妖夢の経験は浅くない。再び先制技を、今度はほぼゼロ距離から連続して叩き込む。如何に効果は今一つでも、数を浴びればダメージは蓄積していく。増してやニドキングの消耗具合を考えれば確実にこのままの流れで仕留められる。

(と、考えているんだろうな)

決して間違いでは無い。寧ろ大正解だ。

霖之助の手持ちポケモンは重く、速攻系のポケモンに反応しきれない場合が多い。重く、硬く、強い一撃を。代わりに速度を捨てたのだ。だからそういった相手に速度で劣るのは当たり前だし、スピードで翻弄する相手は苦手なものも事実。

しかし、対策はある。

「今よー! トドメの「ダブルアタック」!」

「抑え込め!!」

『ニドォー!』

『サムッ!?!』

『おっとハッサム、取り押さえられた!』

速いなら、速さを発揮できないようにしてやれば良い。初撃を見切ったニドキングは伸び切ったハッサムの腕を掴むと、そのまま抱擁するように全身を抑え込んだ。これではニドキングが重りかつ拘束具になって、ハッサムは自慢のスピードが使えない。

「ハッサム、振り解いて!」

「10まんボルト!」

『ニドオオオオオッ!!』

『サムアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

『強烈な電撃の洗礼が炸裂っ! これは厳しいぞ!』

後は、腕や足が不要な技で攻めれば良いだけだ。間に挟むものが何も無い状況での電撃、大ダメージは避けられない。

強烈な電気ショックをタツプリ浴びせられたハッサムは、その場で黒煙を全身から上げながら跪いた。攻撃が終わっても未だ帯電しているようで、時々その赤い身体に黄色の電流が迸る。

「麻痺したらしいね。ご自慢のスピードもガタ落ちだ」

「ハッサム、頑張つて! まだ行けるよね!!」

『ムウ……、ハッサアッ!』

上空から岩の大群が降り注ぐ状況を前に、ベロリングのトレーナー幽々子は冷静さを保っていた。

いや、寧ろ冷静過ぎるくらいに平常心を保っている。

「トドメよ!」

「ベロリング、だいたくはつ!」

凜、と透き通るような声が周囲に染み渡ると、ベロリングの全身から眩い光が発せられ起爆した。その速度は落石の何倍も速く、一瞬でコジヨンドに迫る程に強烈な爆風と噴煙が迫る。

(やっぱり、イバンのみ! ね!)

幽々子は前回の「とつげきチョッキ」から「イバンのみ」にベロリングの持ち物を変えていた。この木の実にはピンチになると相手よ

り速く技を決められる効果を持つ。

そしてタイプ一致、あらゆる技の中でも最高威力を誇るノーマルタイプの自爆技「だいばくはつ」。これを先制で放つ凶悪コンボで相手を全て薙ぎ払う作戦なのだ。味方を巻き込む技であるのは正邪の参加したバトルでも証明済みだが、妖夢のカブトプスやハッサムには効果は今一つだ。大したダメージにはならない。

(「いわなだれ」……は間に合いそうにないわね)

それを見越しておいた紫だったが、想像以上に爆発の広がりが増す。降り注ぐ岩は盾の役割も想定しておいたのだが、その前にコジヨンドがやられてしまうだろう。

『爆発がフィールド全体を巻き込む！ これはコジヨンド逃げられないか!?!』

(ごめんなさいね、クリムゾン。私のリードミスだわ)

ミスった、と自分の甘さに歯噛みした瞬間だった。

「ニーチェー！」

『ドオオッ!』

素早くコジヨンドの前に現れる紫色の巨体。霖之助のニドキングだ。その手には捉えた妖夢のハッサムがおり、盾代わりに前に突き出している。大柄なニドキングを、コジヨンドの盾にしようと言うのだ。

「り、霖之助さん!?!」

『ニドオオオオオオッ!!』

『ハアアアアアアッ!?!』

続け様に発生する計算外の出来事に目を白黒させる間に、ニドキング(とハッサム)は爆風に煽られる。

しかしそれがコジヨンドを守り、熱と風からその身を守ったのだ。た。

『ニ、ド……!』

「ニドキング、戦闘不能!」

『何と！ ニドキング、身を挺してコジヨンドを守ったー！ しかもハッサムを無理矢理巻き添えにしたぞー!』

「は、ハッサム大丈夫!？」

『ハサ……、ハ……ッ』

電撃を浴びせられた上に爆風の盾にもなったハッサムだったが、それでもまだ倒れないとは頑丈である。しかし、体力が限界に近い事は間違いない。無理はできないだろう。

一方でニドキングは爆風を受けてダウン。自分よりも細く小さなハッサムでは盾として機能しないので当然ではある。しかし彼の献身のお陰で、紫のコジョンドは『だいはくはつ』から守られたのだった。

「すまない、ニーチェ。君を盾にしてみました」

ボールにニドキングを戻しながら謝る霖之助。

謝るくらいなら何故カバーしたのか。その問いを口から出そうとして、紫はすんでの所で飲み込んだ。きっと大した意味も無いだろう。コジョンドを生き残らせる方が、勝率が高いと踏んだ程度の認識に違いない。

女性にええかつこしいするくらいなら、そういった打算をする男だと紫は知っていた。

「霖之助さん、ありがとうございます」

だから紫は、敢えて問わない。ただお礼を言うだけだ。

「例には及ばない。タッグパートナーを助けるのは当たり前だよ」

「あら、身代わりになっては意味が無いのでは？」

「いやいや、ニーチェが相当消耗していたんでね。ハッサムごと道連れで退場して交代するつもりだったんだが……」

しかしハッサムは倒れていない。霖之助の眼ではカブトプスより育てられているように映ったし、メガシンカもしている。恐らくは妖夢がこの場面を任せられるくらいには信頼の置けるポケモンなのだろう。

「ニーチェには悪い事をしてしまったよ」

「後で謝りましょう。それで許してくれますわ」

「ああ。……それじゃあ僕の2体目だ。ジークムント、バトルスタンバイ！」

『ジジイッ!』

『霖之助選手、2体目はジジロンです!』

続いて霖之助が繰り出したのは、老人のような髭を蓄えた巨大な竜型のポケモン、ジジロンだ。

子供好きで非常に温厚な性格だが、怒ればその3mの巨体から繰り出す息吹で街すら吹き飛ばすと言われている。

「ジジロン……、見た事無いポケモンですね」

「アローラのポケモンね。足が遅いけど、その分強いわよ」

基本、アローラに生息するポケモンは足が遅い。しかしその分、他のステータスが高く侮れない性質を持つ場合が少なくない。

幽々子はその高い特攻に加えて突飛も無い発想が飛び出す霖之助の、次の一手を警戒しつつボールを取り出した。

「それじゃあ私も2体目を。ホエルオー、出会え!」

『ホエエエッ!』

『幽々子選手、ホエルオーで勝負を挑みます!』

霖之助の発想に紫の頭脳。恐ろしい事この上無い。

故に幽々子は、より耐久値に優れたポケモンを出す。全長14.5mというバトルフィールドを埋め尽くす程の巨大なポケモン、ホエルオー。特筆すべきは体力の異常なまでの多さだろう。そのタフさは弱点を突かれても、中途半端な威力ではビクともしない頑丈さを誇る。

『ホエッ!』

ボールから地面に着地した瞬間、紫色の閃光が起爆し巨鯨を蝕み始めた。最初にニドキングが撒いた“どくびし”の効果だ。これでホエルオーは少しずつ毒に侵されていく。

「的はデカいが……」

「頑丈さもある、容易には落ちないわね」

ジジロンもコジョンドも、ホエルオーには有効なダメージを与えらる技が無い。後は毒によるスリップダメージをどう活かすか、だ。

「幸いにもハッサムの体力は残り少ない。一気に片付けて2対1に持ち込めば勝機はある」

「ええ。それじゃあ私がハッサムを引き受けますので、霖之助さんはホエルオーをお願いしますね。格闘技で素早く片付け、すぐに増援に向かいますので」

「分かった。ジークムント、ハイパーボイス！」

『ジロオッ！』

後半戦、最初に口火を切ったのは霖之助だ。ドラゴンの他にノーマルタイプを併せ持つジジーロンの放つ大声の波動が、ハッサムとホエルオーに直撃する。相性や耐久値上だと威力は大した事は無いだろうが、足止めには十分だ。

「とびひざげり！」

『コツジョオー！』

更に動きが鈍った所をすかさず膝蹴りを叩き込む。狙いは弱ったハッサムだ。

「シザークロス！」

『ハッサアッ！』

しかしそこはメガシンカポケモン、素早く立て直して反撃に移る。突撃してきた膝を、交差させたハサミで弾き返した。

「れいとうビーム！」

「かえんほうしゃ！」

更にお互いが援護のため、ホエルオーとジジーロンに指示が入る。凍結の光線と灼熱の砲撃が場の中央でぶつかった。もうもうと水蒸気をあげながら、相殺という結果に終わる。

その隣で再び「とびひざげり」と「シザークロス」が衝突していたが、双方にダメージが通らない。

『両者、完全互角！これは勝負が膠着するか!？』

(……までは……)

だがここまでは想定していた。大会に出る誰もが百戦錬磨、自分より強い奴がゴロゴロいるだろう。いくら紫が強いからと言って、1人では限界がある。だが自分に猛者達と渡り合うだけの力は無い。

無いなら……。

「ジークムント、ホエルオーに「りゅうのはどう」だ！」

『ジトッ!』

支える方向に向ければ良い!

『エルルッ!』

『“りゆうのはどう”がヒット! しかしホエルオー、全く堪えていません!』

「紫、少しだけホエルオーを引き付けてくれ!」

「何か策があるのかしら?」

「ああ、状況を動かしたい! そのためには相手のハツサムを利用する必要があるんだ!」

「……狙いは分かりましたわ。では引き受けましょう! クリムゾン、2匹まとめて“いわなだれ”!」

『ジョジョンド!』

再び降り注ぐ岩の雨。怯ませる追加効果があるが、鋼タイプのハツサムと体力お化けのホエルオーには通りが今一だ。

「幽々子様、紫様はまだ控えが残っています。先にコジョンドを倒してしましましょう!」

「一理ありね。ホエルオー、コジョンドに“ハイドロポンプ”!」

「ハツサム、”つばめがえし”で続け!」

前方から怒涛の水流と回避不能の斬撃が迫る中、紫は霖之助の行動を待つ。

恐らく、彼が指示する内容は。

「ジークムント、コジョンドに巻き付いて庇うんだ!」

『ジイッ!』

やはりだ。長い胴体を利用して、コジョンドへの攻撃を完全にガードしてきた。当然、水流と斬撃がそのままジージーロンに命中して体力を削る。

『何と霖之助選手、ジージーロンを盾にしたぞ!? これはどういう狙いがあるのかっ!』

「耐えろ、ジークムント……!」

『ジジ……ッ!』

ジージーロンは伝説級を除くとドラゴンの中で最も高い特殊攻撃値

を持っている。しかし、それ以外の能力はそこまで高くは無いらしい、防御系の能力としてそこそこ高い程度。今は“ハイドロポンプ”を半減で受けたのでしっかりと耐えられたが、2度3度と続けば確実に犬死だ。

大きな脂汗をかきながら、ジジロンは再びコジヨンドを庇う体勢になる。その姿とジジロンの特性を思い出した幽々子は、珍しく顔を顰めた。

「ふむ、それなら先にジジロンを倒して、2対1でじっくりコジヨンドを倒しましょう。ここから逆転ですよ、幽々子様！」

「……妖夢、次で倒すわよ」

「はい！ ハッサム、ダブルアタック！」

「ホエルオー、“れいとうビーム”！」

「“れいとうビーム”を“かえんほうしゃ”で相殺するんだ！」

「クリムゾン、体を低く、ジジロンの陰に！」

「ハッサアアム！」

『エルルルル、オオオッ！』

『ジイローン！』

冷気の光線が再び炎と相打ちになり、水蒸気を生み出す。しかし巨体のジジロンがそこに隠れる事は出来ず、ハッサムの2連撃は両方とも命中した。

妖夢はワケが分からないという顔をした。効果抜群の技を止めたのは分かるが、“かえんほうしゃ”が使えるならハッサムを倒し、ホエルオーを紫に任せられたはずだ。“れいとうビーム”で落ちたとしても、コジヨンド自身が受けたダメージは多くない。控えの1匹と合わせれば十分に勝機がある。

ナメられている、庭師の少女がそう結論を下した、その時だった。

『ジイイイイロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

突如として、温厚なハズのジジロンが咆哮をあげたのだ。



天地すら引き裂かんと言わんばかりに鋭い雄叫びが、相手の反撃を開始する狼煙のように感じたのは、間違いじゃないだろう。

「な、何が……」

「やっぱりそれが目的なのね……!」

「え?」

「ジジーロンの特性は3種類。草タイプの技を吸収する。そうしよく、天候の影響を消す。『ノーてんき』、そして……」

再びメガハッサムとホエルオーを見据えたジジーロンの全身からは緑色のオーラが立ち上っている。高密度のエネルギーが溢れているのだ。

『出たー! ジジーロンの特性。ぎやくじょう』だー! 体力が半分を切ると特殊攻撃力がアップするぞー!』

「特攻が……? それって!」

「反撃開始だ、ジークムント! 『ハイパーボイス』!」

『ジイロオオツ!!』

先程よりパワーアップした音の砲撃が2匹を襲う。体力が残り少ないハッサムは元より、強化された技にホエルオーも耐え切れずに後退を余儀なくされた。

「ホエルオー、大丈夫!」

「ハッサム! くつ、何てパワー……!」

「しかも『オボンのみ』を食べてる。大技で仕留めないと、また『ぎやくじょう』が発動するわよ」

ガリガリと所持していた黄色い木の実を食べるジジーロン。次の攻撃で倒せなければ、発動回数に制限の無い特性が再び使われてしまう。

「だったら……っ、幽々子様! 私が隙を作ります、『れいとうビーム』

で倒して下さい!」

「うーん、そう上手く行くかしら?」

「上手く行くか行かないかじゃありません、やるんです!」

妖夢は再び失念している。勝利に貪欲になっているがために、目の前のジジーロンしか眼中にないようだ。

成程、と幽々子は納得した。ジジローンは単純に盾と大砲を兼ね備えるのみならず、目立つ巨体を利用して真つ直ぐな性格をしている妖夢の目を引き付ける役割もあったのか、と。

(あー、これは負けたかしらね。妖夢の性格を手玉に取れる2人が相手じゃ……仕方ないか)

「ハッサム！ 最大パワーで『バレットパンチ』！」

『サムツ！』

「受け止めるジークムント！ 紫！」

「はい。下から『とびひざげり』よ！」

『コツジョー！』

『ハサツ!?』

文字通り跳んで撃ち込まれた膝を、ハッサムは胴体でもろに受ける。ジジローンの巨軀を伝って駆け上がったコジョンドの一撃がハッサムの体力を更に削り、地面に叩き付けた。

『攻撃後の無防備な所に、特性で強化された『とびひざげり』が炸裂っ！ 最早ハッサム虫の息か!?』

「虫タイプだけに、って煩いですよ！」

「(更に足場も兼ねる、か。あらら、どこまで計算されてたのかしらね) 『れいとうビーム』！」

「『かえんほうしゃ』で迎え撃て！」

カバー用に放った冷気も、今度は炎に負けてしまった。しかも先程より黄緑のオーラが濃い。妖夢が隙を生むために放った『バレットパンチ』を敢えて受けた事で、また『ぎやくじょう』の効果が適応されてしまったのだ。

水タイプのホエルオーに『かえんほうしゃ』の効果は薄い。しかし、これで『れいとうビーム』を考え無しに撃つても無意味な事が証明されてしまった。

「『はねやすめ』だ」

更にここで霖之助はジジローンに回復技を指示。体力ゲージの半分だけ回復するこの技ならば、三度でも四度でも『ぎやくじょう』の使用が可能となる。

「ハッサム、しっかり！ 立って、立ってハッサム！」

『サ、ム……』

「ギブアップしたらどうだい、妖夢。もう十分よく戦ったじゃないか」  
声援を送る妖夢に、霖之助が冷たく言い放った。

そうだ、ハッサムは十分に戦ってくれた。麻痺に負けず素早く動き、相手を翻弄した。それでも勝てないのはハッサムのせいじゃない、リード下手な自分のせいだ。

それに忘れてはいけない。ポケモンを無理矢理に戦わせる事はトレーナーとしてあるまじき事。彼らはヒトの代わりに戦ってくれているのだ。その礼儀を失するのは……トレーナー失格の烙印を押されても文句は言えないのである。

だが……。

「ハッサム」

『ム？』

「もう一発だけ、付き合って」

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

それはそれでも戦おうとするポケモンの意思を無視して良いという意味では無い。

今だ消えぬ闘志を瞳の中に見た妖夢は、最後の攻撃に移る。

「ハッサム！ 最大パワーで……」  
「バレットパンチ」  
「イツ!!」

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

「そう来るなら、こちらも迎え撃つのがトレーナーとしての礼儀！」

「ジークムント、ハイパーボイス」

『ジイイイ、ロオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

硬質化したハサミを再び振りかざし、最後の突撃を試みるハッサム。対するジギーロンも大量に息を吸い、その全てを衝撃波として口から射出する。

音という実態を持たない攻撃は、迎え撃つなら正面から受け止める以外の道は無い。ハッサムは最後の意地をかけ、全身を押し潰すような轟音の中、その鋼鉄の拳を前に突撃を続ける。

「頑張れ、ハッサム！」

「ジークムント、叩き落してやれ！」

『ハアツサアアアアアアアアアアアツ!!』

『ロオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

引かない。退けない。ハッサムは自分が倒れたら主・妖夢が次のポケモンを出せない事を理解していた。

メガシンカポケモンの、エースの名にかけて、ハッサムは確実に前へと進み――

『サムアアアアアアアアアアツ!』

『ジジオツ!?!』

オーラを放つ緑竜の横つ面に、全力を込めて “バレットパンチ” を叩き込んだ。

『ジ、ジロ……』

急所に命中したらしく、ジジローンはグラグラと揺れて体勢を崩しそうになっている。

その姿を見てザマアミロ、と言いたげに不敵に笑うと、ハッサムはその場で倒れた。

「は、ハッサムツツ!!」

倒れたメガハッサムの姿は再び光に包まれる。その輝きが解けて消えた時、メガシンカ前の姿に戻っていた。

「ハッサム、戦闘不能！」

「……ありがとうございます、ゆっくり休んで下さい」

『健闘の末、ハッサム倒れた! ニドキング、ジジローンと強敵を相手に崩れたその英姿、天晴の一言です!』

ボールの光に当てられ、赤い光となって手持ちに戻るハッサム。

これで幽々子・妖夢ペアのポケモンは残り1匹、ホエルオーのみ。対して霖之助・紫ペアは今だ健在のコジヨンドと満身創痍のジジローン、そして明かしていない紫の手持ち1匹。1対3という圧倒的不利な状況に追い込まれてしまったのであった。

「ふう」

幽々子の口から溜息が一つ、虚空に溶ける。その瞳に浮かぶのは冷たい絶望では無く、熱い闘志。

ホエルオーに無理をさせる事を断りつつ、大きく息を吸い込んだ。

「ホエルオー、最大パワーで……はかいこうせん！」

『ホエホエホエホエ……』

ホエルオー自身も既に毒が回って余裕など無いだろうに、トレーナーの指示に従って破壊のエネルギーを集束していく。

最後の勝負というワケだ。例え敗北を喫しても、無様な負け姿を晒すワケにはいかないというプライド。部下が頑張ったのに、自分が頑張らないでどうするという気概。

それに……妖夢の熱い魂が自分も熱くしてくれた。伝わった熱が、自分を駆り立てる。

「はかいこうせん……発射アツ!!」

だから自分の魂を乗せた一撃を、ここに！

「聞こえるか、紫。彼女の熱い咆哮が！」

「ええ、聞こえますとも。応えなければ、トレーナーに非ず！」

「ならば僕が応えよう！ ジークムント、出力最大！ りゅうのはどう？ うつつ!!」

実体を持たない「ハイパーボイス」では「はかいこうせん」を素通りしてしまう。幽々子の燃える魂に応えるには、威力が少々劣る「りゅうのはどう」を選択せざるを得ない。

だが火力が足りなければ……魂で補うまで！

『エルウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

『ジジイイロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

この世の全てを薙ぎ払うビームと、竜気を帯びてドラゴンを象った衝撃波が正面からぶつかり合う。両エナジーは一步も引かずに鏖迫り合いを繰り返し、周囲に紫電の火花をまき散らす。一步「はかいこうせん」が進めば二歩「りゅうのはどう」が押し返し、互いの咆哮と共に密度が倍々に増していく。

「いいつけええええええええええええええええええええええ!!」

『ホエエルウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

『ジイジイイロオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

ぶつかり合う力がやがて閃光と化したその瞬間、フィールドの全て

を包み込むような大爆発が生まれた。正邪のパルシエンや幽々子のベロリンガの“だいはくはつ”など比ではない程の爆発。2匹のポケモンの全力が生み出した全力の奔流が、バトルフィールドの端から端まで蹂躪し尽くす。

黒々とした爆煙が視界を隈なく覆い尽くし、場の状況を完全に隠した。やがてそれも終わって煙が晴れた時……。

『エ、ルオ……』

『ジィ……』

巨竜と超巨大鯨が、目を回して倒れていた。

「……ホエルオーとジジーロン、戦闘不能！ よってコジョンドの勝ち！」

『決まりましたあー！ タッグバトル大会2日目午前の部、そのラストバトルの勝者は、紫選手&霖之助選手ですっ！』

☆

幻想郷タッグバトル大会は3日通して行われる。1日目は1回戦のみを、3日目は各ブロック代表の決勝戦を行う。そしてこの2日目は、今行われた2回戦——準々決勝と午後の準決勝を控える事となっていた。

当然、1度勝ったからと言って油断してはいけない。午後に戦う相手は、午前より更に強いものだから。

「でも、最強の妖精たるあたいが負けるワケ無いし！ 作戦立てて鬼に……綿棒だっけ？ 兎にも角にもパーフェクトってヤツさ！」

Aブロック2回戦を無事に勝ち進んだペアの片割れクラウンピースは、そんな呑気な構えで廊下を歩いていた。

午前と午後の間には昼食を食べるための休憩時間がやや多めに設けられており、各チームはその時間を次の対戦相手のための作戦会議に用いる。

昨日と午前中の戦闘データを元に作戦を組み立て、より有利になる。それを皆がやってくるという事は、より高度なバトルが展開され

るといふ事。即ち更にホットかつヒートアップする魂と知恵の戦いが期待できるのだ。

「ま、気合と根性と相性でどうとでもなるだろ！ 何せあたいは最強だからな！」

……若干の例外がいる事は否定しないでおこう。

さて、この昼休憩だが選手に昼食が配給されたりはしない。食べたヒトは弁当を持参するか、里の食事処に行つて食べるしかない。

クラウンピースは意外にも前者だった。仲良くなつた妖精の友達から教わつたメニューで作つたサンドイッチ、これをぬえと一緒に食べるつもりだったのだが……、肝心の相方が見つからない。

「おーい、ぬえー！」

さつきまでは一緒だったんだけどな、と眉を顰める地獄の妖精。2人分を見越して作つてしまったため、彼女がいなくとお昼が余つてしまう事になる。

「ぬえつたらー！ どーこー？」

いや、余りは持ち帰つて食べれば良い。問題は作戦会議の方だ。

彼女がいなければ作戦が考えられない。一回戦も二回戦も、立案して役割を分担したのはぬえである。彼女がいなければ、午後に敗退してしまう事になりかねない。

折角強いポケモンを手に入れ、自分達こそこの大会の頂点にして幻郷で最強のトレーナーであると証明できる絶好のチャンスなのに、これでは台無しじゃないか。

「あ、いた」

そんな時だった、相棒を見つけたのは。

赤と青の形の違う羽を三本ずつ背中に背負つた、黒いミニワンプの少女。クラウンピースのタッグパートナーである封獣ぬえは、行き止まりになつて薄暗い通路の隅っこで蹲っていた。

「おーい、ぬえ！ 何してんの、そんなトコでこんな時に！ ご飯食べるよー！」

「……、う……っ」

彼我の間にある距離は5mも無い。大きな声で呼びかければ気付

くハズなのだが、ぬえからは返事らしい言葉が返って来ない。

様子がおかしいと思つたクラウンピースは、肩を掴んで揺するためにぬえに近付いた。

「ぬえつてばー！ 返事しなよー！」

「……………め……………」

「え？」

「来ちゃ……………ダメ……………っ！」

突然、ぬえの姿が一瞬だけブレた。

「ぬ、ぬえ……………!?!」

「ダメ……………、ピース……………、戻っ、て……………っ！」

「ぬえ、大丈夫なの!?!」

「だ、い、じよぶだか、ら……………!」

強がっている間もぬえのブレは止まらない。ノイズが走ったかのように姿が二重になる現象が何度も何度も発生する。

呼吸も苦しげだし、ノイズが収まった時に見える素肌には大量の脂汗が見えた。明らかに普通じゃない。

「あは、はは……………、まだ大丈夫だと……………、思った、ん、だけど……………」

「ぬえっ！ 待ってて、誰か呼んで来る！」

「待って!!」

走り出そうとしたクラウンピースを、ぬえは大声で呼び止めた。

「大丈夫、だから……………。ここまで頑張つて来たのに、水の泡にしたら……………勿体無いよ……………」

壁に手をつき、ガクガクに震える膝に鞭打つて立ち上がるぬえ。どう見ても棄権すべきなのだが、彼女は体に無茶を強いてクラウンピースを止めていた。

「で、でも……………」

「本当にヤバくなつたら……………言うから、さ……………。ね？ 後1日半、明日の昼には……………優勝してるんだから……………」

「ぬえ……………」

「勝とう、よ……………、ピース……………」

暗がりでは表情はハッキリとは読み取れないが、笑っているように見



える。そこには相棒を初めとした皆に心配や迷惑をかけたくないという意思が込められていた。

それだけじゃない。自分達はここまで違法行為を重ねて来た上に特訓も重ねた。なのに敗北以外の理由でトーナメントから立ち去るなんて嫌だ。

そんな封獣ぬえという一人の思いを受け、気付いた時には金髪の妖精は首を縦に振っていた。

「……でも、マジで危なくなったら本気で棄権するからね！」

「あり、がとう……」

お昼にしよう、というクラウンピースの誘いに「控室で待ってて」とだけ言い残すと、ぬえは再び蹲ってしまった。

本当の本気で心配になった地獄の妖精だが、ぬえが大丈夫だと幾度も念を押すように言うため、とうとう折れてその場を去って行った。

「はあ……はあ……っ」

壁に背中を預ける形で、独り荒い呼吸を続ける正体不明の少女。ただその全身にはノイズが走っている。

(どンドン周期が早くなってるし、この状態も長くなってる……。お願いだから、明日まで耐えて私の体っ！)

これは、ひよつとしたら寺で孤立している自分への報いなのかも知れない。

マミゾウも白蓮も自分に良くしてくれているのに、自分は悪戯や仇でしか返した覚えがない。それじゃあこんな事になっても、当然なのかも知れなかった。

友達なんて要らない、仲間なんて要らない。自分は孤高の大妖怪であり、誰かの助けなど不要。

そんな考えを見透かされたからこそ、旧知の狸に大会出場を勝手に決められた。

そんな考えを捨てないでいたからこそ、あの日何かに襲われた時に誰も周りに居なかった。

そんな考えを持っていたからこそ……、助けを求める相手もないのだ。

「ママミ、ゾウ……、聖、ごめ……ん」

ぬえの発作が収まりクラウンピースに合流したのは、それから大分時間が経過した後だった。

つづ